

(平和を願って)

- 前泊教授の講演会に参加して「最近のメディアのひどさ」に思う (2018.3)
インド・ダージリンの日本山 妙法寺を訪ねて (2019.12)
ネパールから見えるコロナ問題 (2020.7)
“平和のみみ(美海)ちゃん”と…… (2020.11)
「黒い雨」訴訟 - 戦争はまだ終わっていない！ 国の上告断念は当然！ (2021.8)
被爆者の期待を踏みにじった G7 広島サミット！
戦争を防ぐと核抑止論を正当化、核兵器禁止条約を無視！ (2023.6)
7月のつどい学習会に参加して 改憲的護憲論に思う (2023.9)
ネパールでささやかな平和活動を実践して (2023.10)
教科書での第二次世界大戦の記述 -ネパールで感じた事- (2023.11)
非同盟のネパール外交は？(その4) (2023.12)
=「はだしのゲン」を考える=広島市教育委員会 平和教育副教材から削除！ (2024.1)
=能登半島地震に思う= 地震列島に原発はいらない！ (2024.2)

(ワンダフルライフ)

- ネパールからナマステ！ (2015.9)
ネパールから翁長知事に激励のメール (2015.10)
ネパール報告記 (その3) (2016.1)
9条の会の旗を尋ねて、幾千里！ (2016.10)
小さな国の方達と交流して感じたこと(ブータン、ネパール) (2016.11)
言葉と文化 (2017.3)
ネパール語に”ふるさとを想う！！” その1 (2017.9)
ネパール語に”ふるさとを想う！！” その2 (2017.10)
悲しい現実…ネパールのカースト制 (2018.2)
ネパールでの生活(1) (2018.8)
原爆展に参加して ネパールでの生活(2) (2018.9)
日本で話題になっている「留学生」とは ネパールでの生活(3) (2018.10)
中国とインドとのはざままで…ネパールのしたたかさ？ ネパールでの生活(4) (2018.11)
被爆「ハマユウ」がネパールにも！ (2019.10)

(明るい街に)

- 神戸市の「都市空間向上計画」って何？？ (2019.8)

(読んだ見た聞いた)

- ミサイルでコロナを滅ぼせる！？ 中村医師「良心の実弾」ビデオを見て (2020.8)
「奇跡の街合唱団」のコーラスミュージカルを見て (2022.8)

(エッセイさまざま)

ネパールにも9条の会の旗が！！ (2014.12)

3年ぶりのネパール まずはコロナの洗礼から・顛末記 (2022.10)

3年ぶりのネパール ネパールのこの3年間で変わったこと・・・ (2022.11)

3年ぶりのネパール チベット難民とネパール (2022.12)

3年ぶりのネパール ラチェン村、三度目の訪問・・・過疎化の進行 (2023.1)

3年ぶりのネパール ネパールの国政選挙の様子とその結果に思う (2023.2)

(平和を願って)

前泊教授の講演会に参加して「最近のメディアのひどさ」に思う (2018.3)

島田徹 (竹の台)

前泊沖縄国際大学大学院教授が2月18日の講演会で「名護市長選挙でのメディアをつかった情報のねつ造がひどかった」との話をされました。

無責任というよりは悪意を持って、「フェイク情報」が真実かのように垂れ流され、世論操作が行われているように私は思います。安倍首相が頻繁に行っているマスコミ代表との食事会を通じた対策が効いたのか、今や商業新聞を中心にしたマスコミは真実を伝えず、大本営発表を「村度」した範囲内での報道しか行っていないように思います。特に、NHKの「政権与党の礼賛」報道はひどく、朝のNHKのラジオニュースでは北朝鮮問題と安倍首相の言葉が何十回も出てきます。また、原発や核兵器の問題についても、安倍政権の見解をそのまま伝える報道となっています。



さらに、これらに関する裁判案件も地裁では勝訴であっても上級審では敗訴になるのを見ると、この日本には正義はあるのか！！と、腹立たしく思っています。(ところで、今、学んでいるネパール語で裁判官の意味は、「あたたかい、真心のこもった」という語彙から派生した「正義・公正を行う人」であるのが、興味深いところです)

こうした中で、小さい出来事かもしれませんが、最近、神戸新聞の社是の変更がありました。

神戸新聞が創刊120周年を迎える機会に、社是をこの2月11日付けで「私たちは公正に伝え、人をつなぎ、くらしの充実と地域の発展につくす」に変えました。旧社是には「公正」の文字がありませんでした。あえて今の時期にこうした変更を行ったことに、長い読者である私としては、嬉しく思いました。

ついでに今、安倍から攻撃されている朝日新聞の綱領(別記)を見ました。すごい！の一言です。この綱領は、マスコミ関係だけでなく、あらゆる立場の人たちの指針となるもののように思います。

「9条の会」が地道であるが、真実を伝える活動を継続していくことの意義が一層あると感じました。

(別記) 朝日新聞綱領(1952年制定)

- 一、不偏不党の地に立って言論の自由を貫き、民主国家の完成と世界平和の確立に寄与す。
- 一、正義人道に基いて国民の幸福に献身し、一切の不法と暴力を排して腐敗と闘う。
- 一、真実を公正敏速に報道し、評論は進歩的精神を持してその中正を期す。
- 一、常に寛容の心を忘れず、品位と責任を重んじ、清新にして重厚の風をたつとぶ。

日本山妙法寺(にほんざん みょうほうじ)というのは、日蓮系の宗派で、この宗派によって建立された諸寺共通の名称です。指導者は藤井日達師(1885~1985)で、1914年静岡県田子の浦にお寺を開創したのが最初で、中国・インドや世界各国に建立しています。藤井日達師はインドのガンジーの影響を受け、広島、長崎の原爆を契機に非武装・不戦を主張し、原水爆禁止・軍事基地反対の平和運動を展開しました。今、日本山妙法寺渋谷道場は日本の各宗教界での「宗教者 9 条の和」の事務局として活動しています。



国民平和大行進(毎年、各地から広島・長崎へ行進している)で、「南無妙法蓮華経」と唱えながら太鼓をたたいているお坊さんがいますが、私もよく一緒に行進しました。

このようなお寺でしたので、私は 4 年前にネパールのルンビニ(ブッダの生誕地)と2年前はポカラにある日本山妙法寺を訪問しました。ルンビニのお寺の入口には「9 条の会」の旗がありました。

今回は、ネパールから少し遠かったのですが、インド・ダージリンにある日本山妙法寺を訪問しました。地元の運転手もお寺のことを「Hiroshima,Nagasaki,peace temple」と言って、よく知っていました。お寺の周辺はよく清掃されていて、木立のなかにあって静寂そのものでした。日頃喧騒の中で過ごしている私にとって、本当に癒される場所でした。

本殿では、藤井日達師の経歴を中心とした展示がされていました。広島、長崎関係の展示を探している時、寺の関係者がおられたので、「日本から来ました」と伝えると、日本人のお坊さんが来て、私を別室に案内してくれました。そこには、このお寺の 27 周年法要のために来られたアメリカから 2 人、イタリアから 1 人のお坊さんを紹介してくれました。世界的規模のお寺だということをつくづく実感しました。私がこのお寺を訪問するのは、ルンビニ、ポカラに続いて 3 つ目ですと伝えると大変喜んでくれました。現在、ネパールのカトマンズにも建設中で 2 年先に完成すること。2 年先にカトマンズで再会することを約束して、お寺を後にしました。

ただ、お寺に広島・長崎の展示室があったかどうか確認できなかったのが、悔やまれました。

ネパールから見えるコロナ問題

(2020.7)

竹の台 島田 徹

日本は海に囲まれており、国境というイメージがよくわかりませんが、大陸の国では、まさに陸続きでクシャミをすれば隣の国にウイルスは飛んでいきます。



そもそも国境周辺の人々は以前から、言葉も文化も同じで双方の行き来は当然で、親戚もいます。時の権力者が勝手に国境ラインを引いたもので、地元住民からすれば迷惑な話です。実際、ネパールとインドはパスポートも必要なく自由往来できます。地元の人は検問所を通るのは面倒なので、川の浅瀬を渡って親戚の家や商売に出かけることもできます。ネパールと中国も場所によっては、右上写真のように峠道に石が積まれているだけです。

インドの感染者が40万人を超えるなか、隣のネパールでは、日々400人ほどの感染者が発生しています。これは主に出国労働者が仕事なくなったため、ネパールに戻り、2週間の隔離施設での検査が主な要因です。出国労働者の送金額がGDPの30%近くあり、ロックダウンを続ければ国も立ち行かなくなる状況で経済活動を再開し始めました。しかし、国民はこれからの生活に展望が見えない状況です。ちなみに、知り合いの旅行会社への支援策は、ロックダウン中は銀行からのローンの利子を2%下げただけです。こうした貧困国への支援が国際的になれば、コロナ問題は解決しません。

コロナ感染は富める者と貧しい者を区別しませんが、その犠牲は貧しい者に多く出ています。例えばアメリカでは黒人の死亡者が白人の2倍とのこと。経済格差が命の格差となっています。

今回のコロナウイルスの根源は、自然破壊を進める人間と、体内にウイルスを潜在化させている動物との近接状況をもたらしたと学者が指摘しています。この近接状況を一層進めているのが今の利潤第一主義と環境破壊(地球温暖化)を顧みない経済体制(新自由主義)であり、これを見直す必要があるとの声が高まっています。

地球に国境はない！今こそ、世界が力を合わせてコロナ撲滅に向けて進むべき時と思います。

“平和のみみ(美海)ちゃん”と……

(2020.11)

竹の台 島田 徹

“平和のみみ(美海)ちゃん”をご存知ですか。1975年(昭和50年)に神戸市会において、神戸港に入港する外国艦船に「非核証明書」の提出を義務付ける非核「神戸方式」が制定されてから、今年で45年になります。非核「神戸方式」の記念碑として、建立実行委員会が2008年に華僑記念館の故林同春さんの好意で敷地内に建立することができました。本来は、ハーバーランド内に設置場所を提供してほしいと神戸市に願い出たのですが、拒否されたため、この地となりました。しかし、今から考えると元町駅から場所も近いので、見学者も多いようです。ちなみに私は同委員会の事務局長でしたので、寄付集めにTシャツ販売などで苦勞したことが思い出されます。



ところで、今年の2月に韓国の平和団体(spark)が「非核釜山港」を実現したいとのことで、兵庫県原水協との交流フォーラムがあり、これに参加しました。みみちゃんの見学も予定されていると聞き、汚れが目立ってきていたみみちゃんを廣島先生(製作者)と一緒に「洗い」ました。

この時、平和の声を聴く姿のみみちゃんが「戦争の足音が聞こえてくるよ！」と私にささやいたように思いました。戦争はいまでも世界各地で起こっており、日本も自衛隊が戦闘地域に行く準備がすでにできています。「ごめん、ごめん、私たちの努力がまだまだ足りないようだ。みみちゃんも平和が続くように応援してね」とつぶやきました。

これから冬を迎えるので、みみちゃんにコートを着せたいと思っているのですが……。

(追伸 核兵器禁止条約がこの10月に世界の50ヶ国が批准したので、来年1月に発効することになりました。日本政府に核兵器禁止条約への署名・批准を迫りましょう。)

「黒い雨」訴訟——戦争はまだ終わっていない！ 国の上告断念は当然！

(2021.8)

竹の台 島田 徹

7月14日に広島高裁は「原爆黒い雨被爆者訴訟」で、広島地裁の昨年の勝訴判決(原告全員を被爆者と認定)を支持・強化し、国らによる上告を退け、原告84人に対し被爆者健康手帳の交付を命じました。国はこれまで「平成3年の専門家会議で検討を行った結果、黒い雨降雨地域における残留放射能の残存と放射線によると思われる人体影響の存在を認めることはできなかった」を根拠に放射能の影響を受けなかったとしていました。しかし、広島高裁は「争点は放射線の影響をうけた『事実の有無』ではなく、『可能性の有無』として、これまで国に釈明を求めていました。こうした経過の中での高裁勝訴判決でした。



原告は、原告84名中すでに19人が亡くなっており、全員が高齢であることから、国家権力による理不尽な「弱者いじめ」というべき上告を直ちに撤回すべきとして、国に対し上告断念を求めるネット署名や国会前の集会など最後まで「命を懸けての戦い」を貫きました。そして、26日、国は上告を断念しました。

高野正明原告団長は「戦争はまだ終わっていない、今後、原爆被爆者認定の第1種健康診断特例区域の拡大をはかり、すべての「黒い雨」による被爆者を被爆者援護法の「被爆者」と認めるよう国に求めていく」決意を示しています。

憲法25条の「生存権、国の社会的使命」には、国は社会保障の向上及び増進に努めなければならないことが明記されています。また、核兵器禁止条約が発効し、被爆者支援へ動いている中で、国は世界の流れに沿った対応をすべきです。

当会では、8月22日(日)14時から西区文化センターで「戦争体験を聞く会」を開催します。昨年12月に発行した「私のなかの戦争—戦争体験を語る(第2集)」は12名の方に投稿していただき、今回3名の方から体験を聞く会としています。投稿者のうちすでに2名の方が亡くなりました。「戦争してはダメ」という強い願いと「黒い雨」訴訟団の方々の思いを重ね合わせれば、私たちは「戦争はまだ終わっていない」ことを再確認して、憲法を守り発展させる活動に取り組む必要があると思っています。

(黒い雨 A5 版 151P 1冊 500円)

被爆者の期待を踏みにじった G7 広島サミット！

戦争を防ぐと核抑止論を正当化、核兵器禁止条約を無視！（2023.6）

島田 徹（竹の台）

G7、主要 7 か国首脳会議が被爆地広島で行われ、5 月 19 日「核軍縮に関する広島ビジョン」が発表されました。その内容について、被爆者や被爆者団体から大きな批判の声が上がりました。

それは、この広島ビジョンの中には「被爆者」「核兵器禁止条約」の文字がありませんでした。また、広島ビジョンはロシアや中国へ核兵器の廃絶を求めながら、自らの核兵器廃絶にはふれていません。ウクライナのゼレンスキー大統領を呼んでの広島舞台で、「核抑止力論」の正当化とウクライナへの軍事協力を謳いました。被爆者からすれば、核兵器を使用する前提としての「核抑止力論」を被爆地広島から世界に発表することは、被爆者の願いを踏みにじる悪業としか言いようがありません。被爆者 2 世でカナダ在住のサー口節子さんは「G7 は大変な失敗だった。多くの被爆者は同様に考えている」、日本被団協の木戸事務局長は「願いは裏切られた。核抑止論に立った議論、戦争を煽る会議になった」と批判しています。

核兵器禁止条約は核兵器の「開発・製造・貯蔵」はもとより「使用、使用の威嚇」も禁止されています。また、「条約締約国の領土と管轄地域への核兵器の配備、配備の許可」の禁止なども明記されています。したがって、日本が、アメリカの核の傘に依存する限り、この条約への参加は不可能になります。

唯一の被爆国である日本政府は、戦争放棄の憲法を持っており、さらに国連憲章の平和主義を生かす先頭に立つべきです。しかし、アジアで戦争を煽る先頭に立つ国であることに憤りを感じます。

また、マスコミはこのような広島ビジョンの「戦争を煽る会議」の問題点を追及しないばかりか、賛美さえしています。平和憲法を持つ日本、そして被爆者の願いを無視するメディアの責任は大きいと思います。

私は「兵庫の語りつごう戦争展」のメンバーとして毎月 1 回、原爆投下地点の「着物やガラスが刺さった絵」の展示物の横で戦争資料整理にあたっています。原爆は日本人にとって過去のものではなく、今も原爆症で苦しんでいる方々がおられます。そして、先日訪問した南西諸島がミサイルの軍事要塞化へと、急ピッチで進められていることを目の当たりにし、あらためて今回の G7 広島



ビジョンに大きな怒りを感じています。

7月のつどい学習会に参加して

改憲的護憲論に思う (2023.9)

島田 徹 (竹の台)

7月16日に7月のつどい「憲法9条で日本は守れるかⅡ～翼賛体制にくさびを打ち込むために～」のテーマで八木和也弁護士の学習会がありました。これは昨年の5月のつどいで八木先生から学んだ学習会のパートⅡの内容でした。わずか1年後の学習会でしたが、レジメの内容も憲法9条をめぐる情勢が悪化して、護憲勢力が押し込められていることがにじみ出ていました。

昨年の学習会はロシアによるウクライナ侵攻を受けての時期であり、その時の学習会で学んだのは「改憲的護憲論」でした。つまり、安保条約は賛成、自衛隊は賛成、しかし、憲法9条は守りたいという世論の考え方が護憲派の中で大きくなっているというものでした。その時、私が思い出したのは、「憲法9条にノーベル賞を」の運動に対する世界の平和活動家からの批判です。つまり、日本での世論調査では日米安保条約に賛成するのが過半数以上あり、一方、憲法9条を守りたいというのが60%以上もあるというのは、戦争はしたくない、他人に国を守ってもらいたいという国民性にノーベル賞云々の資格はないというものです。この批判の本旨は軍事同盟に賛成しない世論を作るべきとのことです。

しかし、この改憲的護憲論の危うさは、岸田内閣が昨年の12月に閣議決定した「安保3文書」に基づく関連5法案への各党の態度に現れてきたように思います。つまり、その法案の一つである「軍需産業支援法」に自民、公明、維新、国民の賛成はもとより、立憲民主党までも賛成したのです。日本共産党、沖縄の風などが反対しましたが成立しました。この法案は、軍需産業の利益を保証して育成し、それでも難しい企業は国営企業を設立するという法案でした。まさに「平和の準備」ではなく、「戦争の準備」の法案でした。私がこの3月に南西諸島で見てきたミサイル基地強化の支援策そのものです。このことはすでに改憲的護憲論すら成り立たなくなっていることを示していると思います。



八木先生が今回の学習会で強調したのが、こうした世論の変化、「日本人の精神構造の変化」であり、「中国による台湾侵略」があるかもしれないというマスメディアを使つての恐怖の増幅によって、「軍備の備え」こそが「平和への準備」と思わせる世論を作つて来たとのこと。これにくさびを打ち込むには、一人対一人の対話を積み重ねるしかないとのことでした。

私たちが行う「1の日行動」での宣伝・署名活動でも確かに「軍備が必要」との声が多くなってきています。このような世論に対して、結局は一人対一人でゆっくり対話をして、その対話の基軸は憲法9条が第2次世界大戦の加害者としての反省から作られたものであることをしっかり訴えることの重要性を説かれました。

私もこの学習会に参加して、コツコツとがんばろうとの思いと同時に、「戦争の準備ではなく、平和の準備の展望」をもう少し具体的に確信にしていただければと思いました。

ネパールでささやかな平和活動を実践して（2023.10）

島田 徹（カトマンズ滞在）

毎年、数か月間、ネパールには日本語学校のボランティアとして滞在しています。もう、7回目となりました。本来は2週間ほどのトレッキングも目的ですが、今回の滞在は2か月間と短いため、トレッキングはあきらめました。

ところで、昨年は9月から11月まで、コロナが終息したので、3年ぶりに行く事が出来ました。この時には、ネパール AAPSO (Afro-Asian People's Solidarity Organization) という、日本 AALA (アジアアフリカラテンアメリカ連帯委員会) とも友好関係にある組織の事務局長である Gopal さんと交流することができました。



（ 今年の歓迎会の様子 ）

このネパール AAPSO は例年、日本 AALA の大会などにメッセージを送ってきていますので、私は Gopal さんと無理やり関係を作った次第です(笑い)。この組織の状況はわかりませんが、大体、大学教授などが主なメンバーのようでそれほど大きくはないようです。この組織の会長は元首相のオリ(統一共産党)がなっています。ネパールには、大きな政党がなく、統一共産党とマオイストセンター(共産党毛沢東主義派)の2つは中国寄り、そしてネパール会議はインド寄りの3つが主な政党と言えます。中国とインドに挟まれた小国のネパールには、他にも多くの政党があり、連合政権によって大体2年おきに中国派とインド派の政権が交代している状況です。しかし、

組み合わせは自由ですので、今の政権は毛沢東主義派とネパール会議の連合政権となっています。いずれの政権になってもインドと中国を競い合わせ、援助金の争奪戦が政権の主な任務のように思います。憲法では非同盟中立が規定され、核兵器禁止条約に署名はしていますが、批准は未だしていません。

今年の滞在は、7月21日から10月7日までで、ちょうど原水爆禁止世界大会の時期でしたので、ネパール AAPSO と共催で原爆の展示ができないかと事前に思いを巡らせました。そのため、日本から原水協が取り扱っている原水爆関係の写真パンフレットと、兵庫県原水爆被害者団体協議会の副島さんから、「母親が来ていた羽織」をお借りして、持参しました。

ネパール AAPSO もこの時期には、集会を開催しているとのことで、8月5日の集会には、私にも報告依頼がありました。

当日の参加者は50名ほどで、カトマンズのホテルで開催されました。メインスピーカーは、トリブバン国立大学教授の Sabit 先生の話です。先生は、広島・長崎の原爆投下前と投下後の町の様子、ウクライナの戦争被害の様子、ネパールに原爆が投下されたらどう影響があるかなど興味ある内容でした。

私は、「日本は平和なのか」のテーマで、この3月に視察した南西諸島の自衛隊基地の様子、日本の軍事予算倍増の内容、核兵器禁止条約への日本政府の対応などを説明しました。日本から持参した羽織には皆さんの反応がありました。



また、8月8日には、私がボランティアをしている日本語学校でも簡単な説明をしました。ネパールではこの学校だけが毎年、8月6日から9日まで、原水爆関係資料の展示とビデオの視聴などを通じて、原水爆禁止を訴えています。この先生が2011年に広島原爆資料館を訪れたことをきっかけに毎年原爆展を続けています。私もこの学校が気に入って、いつも話をしています。



今回は約40名の学生が2時間ほどの説明会に参加しました。この時の説明資料は、先生が独自で作っているのですが、いつもこの内容には感動させられます。

日本の学校で、このような平和学習が行われているのでしょうか。

今後もこうした平和活動を続けていきたいと思っています。

教科書での第二次世界大戦の記述（2023.11）

—ネパールで感じた事—

島田 徹（竹の台）

先月の HP でも書きましたが、ネパールのある日本語学校で実施した広島・長崎の原爆に関する授業の報告です。

今年 8 月 6 日の学生への平和授業はもっとわかりやすい内容にしようと思い、兵庫県被団協の方から「母親の羽織」をお借りして、現物を見せながら説明をしました。第二次世界大戦でネパール人はイギリス軍、インド軍の「ゴルカ兵」として参戦しています。アジアではシンガポールやビルマ戦線で戦っており、全体の戦死者は 8,000 人、負傷者は 20,000 人となっています。

（注）イギリス東インド会社とネパール王国（ゴルカ王朝）が 1814 年に戦争をしたときの兵隊のこと。イギリスはその勇敢さに敬意を払い、以降、ゴルカ兵として雇用する契約を交わし、現在に至る。ゴルカ兵に雇われれば 10 倍の給料になるので、競争率が激しい。今日、仕事がないネパールでは、ロシアの外国人部隊に入っている人もいるとのこと。

実は、こうした第二次世界大戦について、学生たちの反応がもう一つでした。ただ、広島・長崎の原爆だけは知っていました。

念のため、私は、第二次世界大戦を教えられている高校 1 年生の社会科教科書を調べました。そこには、ヨーロッパ戦線の状況や英国から勲章をもらった人達の列挙でした。年表には「広島・長崎への原爆“攻撃”striking」の一行だけの記述でした。

（注）ネパールでは日本の高1相当で卒業するのが 80%。その後 2 年制の学校に行ってから大学に行くのが通常コース。

しかし、学生は福島原発事故(tunami)のことは知っていましたので、核兵器廃絶の必要性を強く訴えました。ネパールは核兵器禁止条約の署名をしていますが、批准が未だです。中国とインドへの配慮が交錯しているとのこと。いずれにしても早い批准を願わざるを得ません。

ところで、国が違えば、物事のとらえ方が違うことが、別の場面でもありました。

写真のように、知り合いが私に T-shirts をプレゼントしてくれました。その写真はアフリカ、ヨーロッパ、中東を中心にして、人々が手をつなごうという構図です。ネパールが加盟している南アジア地域協力連合は東からブータン、バングラデシュ、インド、スリランカ、モルディブ、パキスタン、アフガニスタンの8か国で、中東に傾いています。この写真には東アジアという地域が出てきません。これもネパール人の世界観の一面だと思いました。ヨーロッパ人から見れば、日本は極東の地です。



このように、国が違えば物の見方が違う、相手との共存が大切ということを日々実感しています。しかし、島国の日本では、外国は「海外」であり、遙か遠く、多民族、他国との接触が少ないため、相手の立場を理解することが難しいように思います。そのため、「人の命より国優先」「自由・民主主義」などと、一方的な価値判断を国民、他国に押し付け、排除する態度は、こうした地政学的環境から生まれてくるのでしょうか。



日本国憲法がアジア諸国を侵略した反省から、世界平和を真剣に希求していることは、新たな世界紛争の時代に入ったと思われる今日の情勢に見合った、すばらしい最新の方針だと思います。ロシアのウクライナ侵攻やガザでの紛争を見るにつけ、「人の命を守れ！」「直ちに戦争をやめよ！」「平和的外交！」の声をさらに大きくしていくことが大切だと思います。

非同盟のネパール外交は？（その4）（2023.12）

島田 徹（竹の台）

ネパールに 7 月から 10 月までの滞在中、外交の一面を見る事が出来ました。

ダハル首相は7月にインドのモディ首相と会見し、9月の国連総会に出席し、環境部会では議長として環境問題について先進国の責任を強調し、アメリカとは MCC という開発プロジェクトを協議。その足で中国の習近平国家主席と会談し、一帯一路事業の推進を確認しました。いずれの会談も、「援助」の成果を誇るものでした。メディアは「新首相のパフォーマンス」「外交派遣団の多さ」を批判していましたが、総じて、「非同盟」であるネパール外交の努力を評価していました。私は日本のアメリカ追随の外交に比べて、したたかな外交に感心しました。

「非同盟」はネパール憲法に明記されていますが、日本国憲法しか知らない私にとって、このネパール外交を通じて、他国の憲法の内容を知る機会にもなりました。



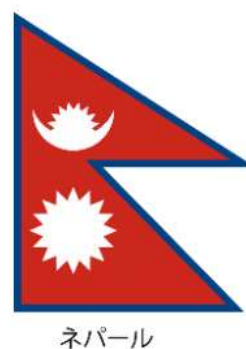
憲法は 2015 年 9 月 20 日「新憲法」として発布されました。当日、この憲法制定を祝う花火が打ち上げられるのをホテルの屋上から見て、歴史的な時点に自分が立っていることを実感しました。ただし、花火と言っても質素で、せいぜい 20 発くらいで、あっという間に終わりましたが、ネパールの発展を祈ったことは記憶に新しいところです。

* 新憲法の制定までの経過:1960~1980 年代までネパール王国の下、政党の無い各層代表によるパンチャーミット体制となる。1996~2006 年毛沢東主義派(マオイスト)と王国派による内戦。2006 年包括和平合意によって 2007 年政党制が復活し、2008 年にネパール国が廃止され、憲法制定議会が発足しました。2015 年に新憲法が制定され、7 つの州によるネパール連邦民主共和国となりました。*

ネパール憲法の条文は政策集のようなもので、国際関係条文は、
【51 条(m)項 国際関係に関する政策: (1) ネパールの主権、領土、独立性、そして国益を守る活動を続けながら、国家全体の利益を考慮して、国連憲章、非同盟、平和 5 原則、国際法と世界平和の規範に基づいた自主的な外交政策を遂行すること。(2) 過去に締結された条約を見直し、平等と相互利益に基づく条約を締結すること。】となっています。非同盟という根本原則と独立した自国の利益という 2 面から外交を進めているようです。

この独立性を押し通す理由は、中国とインドの大国に挟まれながら、双方とは一線を画す事が国の存続条件なのでしょう。

ネパールの独自性については、形式的にも、①世界唯一の三角形の国旗、②世界時間はどの国も 1 時間単位であるに対して、ネパールだけが 3 時間 15 分と分単位の「中途半端」な時間(日本時間から 3 時間 15 分を引かなければならず、ややこしい!)などに見られます。このように「ネパールここに有り」と誇示しているところに、「ネパール頑張れ!」の声援を送りたくなる国と言えます。



ネパール

=「はだしのゲン」を考える=

広島市教育委員会 平和教育副教材から削除! (2024.1)

島田 徹(竹の台)

毎年、平和を考えるために「つどい」を開催しています。今年のつどいは 4 月 20 日(土) 西区文化ホール・なでしこホールで神田香織さんの「はだしのゲンを語り続けて 38 年、今思うこと」のテーマで、講演を予定しています。

この「はだしのゲン」は昨年の夏、大きな話題となりました。広島市教育委員会が平和教育副教材から「はだしのゲン」を削除したからです。しかもその理由が「コイを盗む内容は教育上不適切だ」。「浪曲は児童の生活背景に即していない」。この 2 点を主な削除の理由として上げ、現場からも声があると説明しています。しかし、多くの現場の先生からは、ゲンの行動は生活のためのものであり、その背景を子どもたちに考えてもらうことが大切との声も上がっています。(注:年間の平和教育時間は 3 時間)

この副教材からの削除の背景には、「日本会議」が削除を求める要請をしていたことが明らかになっています。

また、浪曲を時代遅れとする発想には、伝統文化に対する理解が全くないと言わざるを得ません。講談師である神田香織さんの講演を一日も早く聞きたいものです。

ところで、この平和教育副教材からの削除について、広島の被爆者からも強い怒りの声が上がっています。それは、被爆地広島で昨年5月に開催されたG7で、広島出身をアピールする岸田首相は核抑止力の有効性と核保有を正当化することを世界に発信したからです。唯一被爆国の日本政府が「核兵器禁止条約に全く触れず、核抑止論で戦争をあおり、被爆者の願いを踏みにじった。」（「被団協だより」）ことに、被爆者はこれまで以上に裏切られた思いを強くしました。

8月6日の広島平和宣言でも核抑止論からの脱却を求めています。しかし、広島市は被爆地で行っていることとの矛盾をどう説明するのでしょうか。

特に、ロシアによるウクライナ侵攻で、プーチンは核兵器使用をほのめかすなどの危険性が高まっている時に、G7は核兵器には核兵器をとという際限のない核兵器競争を助長しています。

戦争をする国づくりにまい進する岸田政権に、核兵器廃絶を訴える「はだしのゲン」の講話を成功させることが、今だからこそ大事なのではないでしょうか。



<https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4811/>

漫画「はだしのゲン」は、作者の中沢啓治さんが6歳の時に被爆した実体験をもとにした作品です。原爆投下直後の広島の変り果てた街の様子、苦しみ亡くなっていく人々、そして主人公ゲンが戦後の広島を懸命に生き抜く姿が描かれています。

そこに中沢さんが込めたのは、子どもたちに逆境の中でもたくましく育てて欲しいという願いでした。

=能登半島地震に思う=

地震列島に原発はいらない！（2024.2）

島田 徹（竹の台）

正月早々に発生した能登半島地震と羽田空港の航空機事故、今年が不吉な年になるようで、暗い思いになりました。ネパールからも心配のメールがありましたが、世界地図上では能登と神戸は隣町ほどの距離なのでよくわかります。

ところで、「1・17」は私たちにとって忘れられない日ですが、実は、ネパールでは「1・15」が「地震の日」に制定されています。これは 1934 年 1 月 15 日(昭和9年)に起きた大地震は M8.7 で 8,519 人の死者(人口 560 万人)を記憶にとどめるために制定されました。1505 年も M8.7、これ以降はたびたび大きな地震が起きています。最近では、2015 年 4 月 25 日のネパール地震は M7.8 で死者 8,970 人(人口 2,900 万人)となり、世界遺産である古いお寺や山崩れによる村落消滅などの被害がありました。私も同年8月から4か月間ほどネパールに滞在し、地震の惨状を目の当たりにし、阪神淡路大震災と重ねていました。

ヒマラヤ山脈はインドプレートがチベットプレート(ユーラシアプレート)の下に潜り込み、隆起してでき、今も約5mm/年隆起しています。ネパール地震はこのプレートの動きが原因となっており、周期的に起きています。(wiki)

一方、日本列島は、ネパール以上に、ユーラシアプレート、フィリピン海プレート、太平洋プレート、北米プレートの上にあるため、世界で一番危険な条件にあり、地震大国といわれています。

阪神淡路大震災から、日本列島は地震の活動期に入ったといわれ、東日本大震災や今回の能登半島地震が起きました。特に、南海トラフは100~150年の周期で起こり、今後30年間で起きる確率は70~80%と政府は想定しています。

私たちが地震に関してよく見る地図は、下図の右側ですが、世界地図上では、左側の図が理解しやすいと思います。「木を見て、森をみない」の諺とおり、政府は目先の断層地図だけを強調しています。

今回の能登半島地震では、西側にある志賀原発が受電設備の故障から油漏れが発生しました。現在、未稼働なので大きな問題になっていませんが、原子力委員会では、想定外の事故として重要視しています。「安全、安全」とこれまで国民に原発安全神話を押し付けてきましたが、地球規模から見れば地震の巣の上にある国というのは一目瞭然です。

政府は二酸化炭素削減目標達成が困難なことから、原発再稼働(原則 40 年を60年へ延長)を進めています。ヨーロッパもその動きとなっていますが、原発国フランスでは、地震が少なく、高速道路は地震対策を考慮しない設計となっています。地震によるリスクの少ない国と地震大国の日本での原発を同じように考えることはできません。

また、ロシアのウクライナ侵略で、プーチンはウクライナの原発の電源設備をミサイル攻撃しました。福島原発での教訓をこの戦争で実践したものです。ミサイルで原発の電源を攻撃されれば、原発がメルトダウンし、深刻な被害が生じるのは明らかです。原発は直ちに廃炉処分にすべきです。

今年度軍事費の1/4に過ぎない防災予算を増額し、軍備の準備より平和の準備をすることが、国民の安全を守る策ではないでしょうか。



(ワンダフルライフ)

ネパールからナマステ！(2015.9)

竹の台 島田徹;

今春に退職し、10月に1か月ほどの登山計画があり、ポーターと話ができるようネパール語の学習も兼ねて6月末に出発した。



地震の被害状況は古い建物(主に歴史的建造物)の被害が多いが、カトマンズは新しい家が多いので日常生活に支障をきたしている様子は見受けられない。旅行会社の人は、今は雨期で客はいないがこの秋のシーズンが心配だと言っている。観光に行っても彼らの生活を守ることが最大の援助だと思う。

生活状況であるが、計画停電は1日に3-4時間の停電が各2回ある。土曜日が日本の休日で、日曜日から一週間が始まる。私のホテル近くに大きなスーパーがあるが、日本のスーパーと全く同じく、食品から家電製品まで何でもある。生鮮食品(冷凍食品から何でも)の値段は日本の半分以下だが、その他は日本の値段とほぼ同じで割安感はない。例えば、焼きそばは180円、コーヒーは40円。日本と同じようなシャツの下着は1000円もした。どうも食べていくには問題がないようだ。給料は銀行員で40000円。教師35000円、普通の人には25000円くらい。家はどこでも煉瓦作りなのでしっかりしている。これまで3人の自宅に招かれた。日本通の人は日本の家は木と紙できていると笑っている。今回の地震で民家が壊れたのは、50年以上前の古い家が主である。(カット写真はビムセンタワー)

ネパールで有名なのは、「ネパールバンド」という「ゼネスト」である。この2か月で3回体験した。大体、2日間は交通機関が全面ストップするので、会社、学校などは休みだが、日常生活は普通だ。多数の政党(100民族ほどあるので民族政党が多い)があるが、連携して行っているようだ。要求の一部として、20年以上のタクシーの使用禁止に反対。中国とインドとの協定に関して反対などなど。よくわからない。

私は今、ボランティアで小学校の10歳の子に日本語を週3回教えている。ネパール語の勉強も兼ねてなので非常に面白い。最近歌唱指導まで行い、皆の笑い？を得ている。(次号に続く)
(筆者はアマチュア登山家。この半年ほどネパールに滞在するそうです。編集委員)

ネパールから翁長知事に激励のメール(ネパールだよりその2)(2015.10)

竹の台島田徹;

その1

私のホテルにオーストリア人が宿泊した時、日本のことが話題になり、彼が沖縄県に行きたいというのだ。彼の父親が仕事で日本行ったとき、沖縄が一番きれいで感動したそう。彼は今上海で仕事をしており、中国の環境破壊がひどくて、今回ネパールに休暇で来たとのこと。彼がパソコンで沖縄県のWEB



を私に見せた時、軍事基地が記載された地図があったので沖縄の事情を説明すると、「NO' TGOOD」と言っていた。また、彼はオーストリアの自然の美しさを説明してくれた。後日、辺野古の自然を守る翁長知事にこのエピソードを託し、激励のメールを送りました。

その2前回、学校のことを書いたので教育制度について

ネパールでは小学校が5年、中学3年(ここまで義務教育)、高等学校が2年となっており、国際的に大学入学には2年不足するので「10プラス2」と言って2年間の追加学年制度がある。

10年目の卒業試験が「SLC」と言って合格率55%の厳しいものだ。ほぼこの成績順位で就職先や大学入学学部などが決まる。大学進学率は10%未満である。従って、学校も公立より質の高い私立学校への入学希望者が多い。授業は英語でなされている。

その3移民、難民のこと

今、ヨーロッパの最大関心事は難民・移民問題。特に中東(シリアなど)やアフリカなどからの難民・移民がEUに400万人規模で移動している。EUのドイツでは今年、80万人の受け入れを表明しているがEU諸国間で対応に問題が生じている。

ところで、ネパールの家族で親戚を含めれば必ず日本に出稼ぎ関係者がいる。これには驚いた。近年、一年間で新規出稼ぎ者が40万人となっている。ネパール人は英語を話すので、世界中が彼らの仕事場で移住先だ。現在お世話になっている旅行会社の方の兄弟は、アメリカとイギリスに住んでいる。このホテルの経営者の息子もオーストラリアとイタリアに住んでいる。ネパールでは農業が主産業でサービス業、観光業はわずかで、海外出稼ぎと海外移住は周辺諸国と比べてスバ抜けて高い。ネパールの海外からの仕送り額はGDPの25.5%にもなる。まさに出稼ぎ国家となっている。主な出稼ぎ先は中東やマレーシアなど。大学を卒業すれば海外の会社に就職しそのまま移住するので、人材の流失は深刻なようだ。

ネパール報告記(その3) (2016 . 1)

竹の台島田徹

ネパールでの 5 か月間の滞在もアツという間に終わりました。特に今回の目的だった 7000m 級の登山は、地震の影響で山頂付近には大きなクレバスがいくつも発生して、近寄ることができず、撤退しました。自然相手なので仕方ありませんが、悔いの残る登山でした。



ところで、今カトマンズでは、ガソリン等の供給不足によって公共交通機関の制限でバスの天井に乗客が乗っていたり(カット写真)、各家庭ではプロパンガスの購入が難しくなるなど市民生活が深刻化しています。

その原因は、9月に制定された新憲法による「州割り」の問題があります。新憲法制定に向け、国内の州割りの方法について議論がなされ、最終的に7つの区分となりました。

ネパールの自然的条件からは南側のタライ平野(インド側)、北側の中間部と山間部(中国・チベット)の3つ(横に三つ)に分けられます。しかし、政治的諸事情から、タライ平野、中間部、山間部を一つの州として7つに(縦に七つ)分けられました。このようになったことで、タライ平野に住んでいるインド系の民族群(マデシ戦線)は分断されることになりました。従来から「マデシ州」の制定を主張してきたマデシ戦線は、新憲法に反対しています。

新憲法が制定された今日、彼らの憲法変更の要求は一層強くなり、タライ平野での「バンダ＝ゼネスト」も過激となり、軍隊とマデシ戦線との衝突によって死者も出ています。

また、インドから陸路輸送されているガソリン・ガス、医薬品などがタライ平野で滞っているため、その影響がネパール全体に広がっています。

マデシ戦線の強硬な姿勢の裏には、タライ平野は穀倉地帯で新産業の振興があること、インドの「暗黙の支援」、そして、インド系民族に対する北側の「カースト」による歴史的な差別などがあります。ちなみにネパールの人口は2700万人で100以上の民族が住んでいる「多民族国家」です。政府はマデシ戦線の要求を認めれば、「マデシ州」の独立とインドへの併合が予想されるため、この要求を認めないという立場です。政府は中国への接近を強めていますが、国民の中にも「宗主国」であるインドへの反感とナショナリズムが勃興しているようです。当分の間、不安定な政治状況が続きそうです。

9条の会の旗を尋ねて、幾千里！（2016.10）

島田徹(竹の台)

ネパールの山々に魅せられてこれまで足しげくネパールを訪問されている竹の台にお住まいの島田さん。今年も7月下旬に日本を出発されて、ネパールの地を探索されています。今回も愉快的紀行文を届けていただきました。(編集委員H)

昨年、この会のHPにネパールのルンビニ(ブッダの生誕地)に日本山妙法寺があり、そこをお参りしたら、何と9条の会の旗があって感動した記事を掲載した。

今年はその関係記事の取材のために、再び、ネパールを訪れた。実は、昨年のルンビニのお寺の末寺というか、日本山妙法寺が建てた「ワールドピース、パゴダ」と言う結構有名なお寺(写真右上)がポカラにあるのだ。1300mの小高い丘に建っているの、そこにも9条の会の旗があるのかどうかを確認する為に数千里の旅に出かけた。



ポカラはカトマンズからバスで9時間。7時に出発して16時に到着した。ポカラからパゴダまで歩いて行けば3時間ほど。もちろんタクシーで行けば1000円ほどで30分で行けるとのこと。しかし、年金生活の私。お金をできるだけ節約しての旅行。時間はたっぷりある。ここは意地でも歩いていかなければと決断。

翌日、9時にホテルを出発。歩いて1時間ほどでお寺への登山口に着くが、少しでも経験が大事とあえて登山口の手前でシティバスに乗車。1キロ、数分で到着。しかし、バス料金が何と50円！カトマンズでは1時間乗っても20円。おかしいと思いながらも支払った。しかしどう考えてもおかしい。バスを降りてすぐに登山口があったが、登山中、なぜ、マハngo(高い)と言って抗議しなかったのか、そんなことを考えながら登った。

仏舍利

1時間半ほどで駐車場に着いた。下から登ってきたジープなどはここでお客さんを降ろし10分ほどの階段を上る。頂上に着くと約30mほどの高さの白い仏舍利塔(写真左)が建っている。立派な



塔だ。その周りは花園で、これまでのごみごみした町中とは違って、きれいな別天地にたどり着いた心地がした。お堂は朝と夕方にお参りがあるようで今は閉まっていた。お客さんは20人程度だったが、ネパールの別天地と言っても過言ではないので、もう少し宣伝してもいいのではないかと思う。お堂の中を外からいくら覗いてもルンビニで見かけた「9条の会の旗」が見当たらない。何度も角度を変えて覗いたが見えない。残念としか

言いようがない。ルンビニには毎日数百人は訪れているように思うので、ここに旗がなくても仕方がないか。とあきらめた。

(参考看護師は余っているので、月給 15000 円、公務員 25000 円、銀行員 30000 円で物価は日本並)

(エピソード)

山頂からは、別の登山道を下って、近道することにした。

しばらく行くと、おばあさんが写真を取ってくれと言うので、写真を取るとお金を請求された。全く心外だったので、断った。この広い道から狭い道との分岐点に出た。細い道の方で間違いないと思いつつも思案していると、おじさんが通りかかったので尋ねると、正しいとの返事。

その道を歩き始めた。するとそのおじさんが私の前を歩き始めた。ガイドブックに載っていた。「親切にしてガイド料を請求するので注意すること」と。この類と思いつつも、ガイドは必要ないと何度も言ったが、彼は私の前を歩く。仕方がないので、ガイド料を請求されたらどうやって断ろうかとそればかり考えながら歩いた。案の定、中間地点で 350 円を要求された。(日当で 500 くらいのはず！) 私は、すかさず、ガイドは必要ないと何度も言った。勝手についてきたといいつつも 200 円なら出すと怒りながら言ったので、フンチャ(Ok)である。メイン道路に出て、ジュース(1 缶 80 円)を飲んで 200 円を渡した。彼はあまりうれしそうな顔をしていなかった。私は「してやったり」とちよつとうれしくなった。

以上のようなことで、「9 条の旗を探して数千里」の旅は終わった。

小さな国の方達と交流して感じたこと(ブータン、ネパール)(2016 . 11)

竹の台島田徹

私が滞在しているホテルにブタン人(こちらではブータンと言っても通じません)がいます。彼はユニセフの職員で 26 歳。私と同じ学校で、英語を教えています。彼はネパール語も話せますので、2年間教えるそうです。ネパールでは幼稚園から英語教育ですので、英語教師が足りないようです。そのような彼に、10月号に掲載されていた「ブータン」の記事を見せたらとても喜んでくれました。



ブータンは、人口 70 万人の小さな国ですが、「世界で一番幸せな国」ということでかつて有名になりました。私もこの内容をよくわかっていませんでしたが、とにかく、彼の話では、医療費、学校の授業料、電気代が基本的に無料であることや、また、大きな国の大使館は置いてなく、日本との友好関係が深い(7月に国王が日本を訪問していた映像を何度も私に見せてくれました。こちらでは誰でもスマホが当たり前になっている)とのことでした。

ブータン政府の「国民総幸福量の定義」は、これまでのように国の経済発展「GDP」だけの側面ではなく独自の4つの基準(1公正で公平な経済の発展、2文化的、精神的な遺産の保存・促進、3環境保護、4しっかりした統治)で判断すべきとの主張です。

いま、「幸福度」については国連や民間団体などがいろいろな基準で各国をランク付けしていますが、他国との比較ではなく、要は、「貧乏(これも西欧的基準ですが・・・)でも不幸と思わない」「お金がなくてもハッピー」と国民が感じられる国造りが大切だなと実感しています。(たぶん、大家族制でお互いを支え合っている安心感があるためかもしれない)



ところで、私の興味を引いたのは、外交方針です。ブータンでは国連の5つの常任理事国の大使館を置いていないのです。非同盟中立国の方針を貫くためとのことです。(実際は中国の侵略を恐れて中国大使館を置かないための措置らしいのですが・・・)ネパールも非同盟中立国の方針です。両国とも中国とインドの大国に挟まれた小国として、生き延びるための外交方針だと思います。

いま世界の各地で紛争と戦争が起きており、大国はこれを利用して小国を支配しようとしています。非同盟中立の国が一致団結して戦争反対の声を大きく上げてほしいと思いますが、憲法で戦争放棄を明記している日本こそこうした非同盟中立国の中心となって世界平和の道を強く主張することが必要ではないでしょうか。経済大国の日本がこうした国々を支援することも世界平和に寄与すると思います。

小さな国の方達と交流する中でこのようなことを実感しています。

(写真の花はブータンマツリ編集者)

言葉と文化(2017.3)

竹の台島田徹

私はネパールに関わっているので、語学を勉強していますが、なかなか単語が覚えられないもどかしさがある一方、言葉の面白さを感じています。

最初に驚いたのは、カタカナの擬音の意味が、ネパール語と似ているということです。唱歌で「雨、雨、降れ降れ、母さんが・・・」の歌で「ピチピチ、チャプチャプ、ランラン」の「チャ



プチャプ」が、意外にもネパール語では「泥をはねる」という意味を持っているのです。そのため、この歌を小学5年生、中学1年生(日本では小学6年生)の生徒に日本の歌として最初に教えて、日本語とネパール語の類似性を説明しています。

ネパール語も日本語もそのルーツにはサンスクリット語もありますので、類似性があるのが当然かもしれません。2, 3の例を挙げると、喉→ガーラ(ガラガラ声)、小言→ガーリ(ガミガミ)、くしゃみ→ハーチュン(ハクシオン)日給→ジャラ(ジャラ銭)、たっぶり→タプヌ、濁った→ダミ(ダミ声)、濡れた→ビジュヌ(ビショビショ)や耕地→ジャガ(ジャガイモ)等々

こうした言葉の「オン」のほかに、興味深いものが言葉の意味の類似性です。例えば、①「社会・共同体→サマジ」「平等→サマーン」「荷物・品物→サーマーン」と②「稲→ダーン」「富→ダン」「金持ち→ダニ」

こうした言葉の意味を私がボランティア活動をした、震災で被災した村落の様子から見ると、それがよくわかります)。

この村落は約50戸ですが、農作業や道路補修等において共同作業が多くあります。共同体では村人が一緒に作業に携わります。①(下左)については、ある農家の稲を脱穀した後、もみを作業場から倉庫に担いで運びますが、男も女もちょうど60kgの荷物を運びます。荷物の重さもさることながら、男女差がないのには驚きました。また、②(下右)については、もみを落とした稲わらを積み上げるのですが、その大きさを稲の収穫高が一目瞭然となり、金持ちかどうか分かりました。



このように、言葉が語源から関連の意味へと広がっていることを実体験し、ますます言葉への興味が高まっていますが、会話はもう一つというのが現状です。

(冒頭の写真は、私のテント。被災地はトタンの家に)

ネパール語に"ふるさとを想う!!"その1(2017.9)

竹の台島田徹



ネパール語を始めて聞いた時に感じたことは、「あれ?チャという言葉がよく使われるなあ」と言うことでした。私の古里(北九州)では「チャ」がよく使われます。「そうチャ」と言って、「そうです」の意味です。ネパール語の「チャ」は正に、日本語の「～である。～だ」と言う意味です。ちなみに「チャイナ」と言う言葉をよく聞くので、中国がネパールに相当進出し



ているなあと思いましたが、これは「チャ」の否定語だったので、中国とは全く関係ありませんでした。

なお、私たちが使う「そうチャ=そうたい」の「~たい」は「強調の接尾語」でネパール語でも強調の接尾語「~ai」の発音なのでなんとなく通じてるバイ・・・ai。(笑)

これがネパール語との初めての出会いでしたが、いろいろ体験しているうちに、結論として「九州の言葉の源流にはネパール語の言葉(オン)が息づいているのではないか」と思うようになりました。

日本語の起源はどこからきたのかという研究はいろいろあるようですが、地政学的にもいろいろな方面から渡来した人達が日本の中で、混ざり合って今の日本人ができ、言葉も作られてきたようです。ネパール語が日本語の源流と言う本もありますが、日本語の中に、実体験で外国語の言葉との類似性を「発見」できることは、どれだけ楽しいことか。外国語を勉強するのも楽しくなってきました。

ネパール語はもともとサンスクリット語がその源流なので、仏教を通じて音(オン)が流入したと思いますので、日本語にそのオンが残っているのも当然かもしれません。

私の推測をくどくなりますが、その道すじを紹介しますと・・・

ネパール語を覚えようとしている私は今、文字文化から少し離れて、言葉(オン)中心の世界にいると思います。その中で、初めて言葉(オン)について考えるきっかけをつかみました。

自分が弥生時代以前の間でその中で生活している、つまり、文字のない、言葉(オン)だけの世界に生きていると考えると、言葉(オン)の重要性が少しわかってきます。思うに、「文字」は為政者が、臣民から税金を取るために、その内容を知らしめるための道具として発明したものであって、臣民たちの日常生活には文字は何ら必要ないものであると思います。当時の人たちは、言葉だけの意思疎通で十分事足りていた筈です。文盲と言う言葉は、それがあたかも悪いかの意味を持っていますが、弥生時代には音だけで十分だと思います。

意思疎通するには、物事の事象、状態を言葉(オン)にして行わなければなりません、言葉と言えるかどうかは別にして、擬音から発生するものが最初の言葉かもしれません。次に、ある言葉(オン)が創られれば、その状態に似た言葉(オン)が次々に作られると思います。昨年に記事として紹介しましたが、「ダ」=稲を基本に「ダン」=富{ダニ=金持ち}「ダ」=寄付「ダンラ」=刑罰」と言う関連語が出てきますし、私はそれを体験しました。

「ダン」=日本語のカタカナで書けば同じ表記(発音)になってしまいますが、意味を変えるには、舌と口の動きでその発音を微妙に変化させなければなりません。日本人にはその発音の区別がなかなか聞き取れません。日本では文字文化が中国、朝鮮から入ってくる中で、母音が5つでも通じるということになったのでしょうか。ネパール語には母音が13もあって、その違いを聞き取ることが難しいのです。中国語の場合ももっとあるので、ネパール人にも難しいとのこと。

以前にも紹介しましたが、私が発するオンが基本的には5つの母音でしかないので、相手には理解できないようです。ネパールでの最初の日に「タご飯を下さい」と言うつもりで「ラトコカナディヌホ

ス」と言ったのですが、発音が悪いので、相手には「赤いご飯を下さい」と理解されて、ホテルの人は皆一步引き下ってざわめき始めたのです。誰かが、夕ご飯の意味だろうと言うことでみんな安心したようでした。

発音が違えば意味が全く違ってきます。そのため、ネパール人はお互いの会話では、相手の口と舌の動きを見て言葉(オン)の意味を理解するのです。

学校の授業で生徒たちに日本語を教える時に、彼らは私の口の動きをじっと見つめて、白板を見ないのです。白板の「ひらがな」より、相手の発する言葉(オン)をいかに正しく聞きとるかが重要で、文字は関係ないのです。従って、彼らの記憶力がいいと言うか、直ぐ、オウム返しに言葉が返ってきます。しかし、そのオンをネパール語で書かせると十分に書けない生徒もいます。(つづく)
(写真は、ガイジャトラと言って、昨年亡くなった方を偲ぶネワール族のお祭りのスナップです)

ネパール語に”ふるさとを想う！！”その2(2017.10)

竹の台島田徹

今は英語教育優先と言うことで、ネパール語は話せたらよく、英語の読み書きが最優先です。もともと英国圏なのでそれも理解できますが、一体、国語教育はどうなっているのか疑問です。



ネパールには100ほどの民族(人口は2700万)がいて、

それぞれ民族語(私のクラス25人の中には4民族の生徒がいて、自宅では民族語、外ではネパール語、学校では英語を使う)を持っていますが、その言葉が急速に消滅しています。ネパール語と言っても民族が違えば同じ意味でも発音が微妙に違っており、相手の言葉を聞き取るのがお互い難しくなっているのが最大の要因とのことです。

また、外国人にとって、ネパール語は同じ意味でも数種類の言葉が辞書に載っているので、どの言葉を優先的に使えばいいのかを尋ねると、どれも使っていると(私の頭に入らない!)そのため、ネパール人にとってもネパール語は難しいとのことです。それを聞いて私も安心しましたが、ネパール人にとって、日本語がいちばんやさしい言葉とのことです。う～ん……。

こうした体験の中、日本でなんとなく使っているカタカナ言葉について、なぜそのような言葉(オン)になっているのだと疑問を持ち始めました。そのきっかけが、次のことでした。

ネパールでは6月から9月中旬までは雨期の季節で、1日に1回はジャー(ちなみに雨のことをジャリと言いますが…)と雨が降ります。泥道が多いのですが、水たまりに長靴で踏み込めば「チャプ」と音が出て、泥が跳ね返ります。私も子供の頃に面白がって、泥を跳ね返っていたことを思い出します。ネパール語では「泥を跳ねる」という動詞は「チャブヌ」(ヌというのは動詞の辞書形で、日本語の動詞の遊ぶ、行くの形と同じ)と言います。

「チャプ」と言うのは擬音から作られた言葉(オン)だと思いますが、その意味が物事の状態を現すのにぴったりだと思います。生徒たちには「あめあめ降れ降れ」の歌の中の「チャプ、チャプ」の意味を教えて、「日本語とネパール語は同じ」と言う歌を創って、歌っています。

(なお、ランランランの・・のランは「色、色彩」ですが、「ラマイロ」という言葉は「楽しい、愉快」と言う意味があり、なんとなく、通じているような気がします)

こうした言葉は多くあり、別項で紹介しますが、取り合えず、「ネパール語にふるさとを想う」と感じた決定的な言葉は、「チャ」の他に「ジュンダレている」「アッチャマー」「スタメル」という言葉でしょうか。関西にはこうした言葉はないと思います。

「ジュンダレてから、みっともなか！」と言えば、昔、子供たちがだぶだぶの服をだらしなく着ているような様子を叱っている時の言葉です。ネパール語では「ジュンデャウヌ」が「垂らす、吊るす、掛ける」と言う意味の動詞です。雰囲気似ていませんか。

「アッチャマー」は驚いた時に使う言葉で、ネパール語では「アチャンマ」が「驚き、驚くべき」です。正に、アチャンマです。(英語の astonish もちょっと似ているかな・・)。私はこれをよく授業で使って、生徒たちの笑いを誘っています。

「スタメル」とは、茶瓶に残ったお湯を最後の一滴まで、湯呑に入れること。ネパール語の「スタウヌ」は「(太陽、月が)沈む」と言う動詞で、丸い一滴の水が落ちる様子と重なり合っているようで、興味深いところです。無理なこじつけかもしれませんが、これが九州にネパール語が息づいている「証拠」の一端と考えています。

しかし、実は、多くの日本語の中に、ネパール語が息づいているようです。

以下、クイズ形式ですが、ネパール語(左側のオン)の言葉と、右の日本語の関連語(順不同)を見つけてください。

(①=③のように回答を順番にしたものをシマダまで、10月末までにお寄せください。全問正解の方に帰国してから粗品進呈！)ja6fia-jm3rno1650@tea.zaq.jp

①クネ②チョット③クス④ジャガ①すばらしい②薄い③ねずみ④だます

⑤チュヌ⑥ダミロ⑦フス⑧スバ⑤真珠⑥賄賂⑥去る⑦ずるい⑧少し

⑨ムシャ⑩バラバラ⑪チョロ⑨赤字⑩つかえ棒⑪奉仕⑫きれい

⑫カタル⑬モチ⑭クワウヌ⑮ヒサブ⑬濁った⑭足⑮思い出・記憶

⑯バダイ⑰ハラウヌ⑱ガタ⑲ダクヌ⑯触れる⑰商売⑱食べさせる⑲等しい

⑳ヤド 21.ガリー 22.フクヌ 23.クッタ⑳吹く 21.耕地 22.叱る 23.おめでとう

24.セワ 25.ドウルタ 26.サルヌ 24.曲がる 25.息子 26.少々

27.テコ 28.ケヒチン 27.ゆりうごかず 28.覆う

(ヒント・・主には日本語のイメージと音が一致する部分があります)

写真説明(上右・教室、下左・修了式、下中・テント前、下右・家の中)



悲しい現実・・・ネパールのカースト制(2018.2)

竹の台島田徹

ネパールのニストスクール(カトマンズ)でのボランティアも3年目となり、今回の修了式を最終としました。また、2年前の地震で被害を受けた村(タマン族の村)の小学校の訪問も毎年行いました。

学校に関わる中で、都市部と農村部との教育設備や教育水準での格差の大きさを痛感しました。これは都市部と農村部での所得の格差がそのまま教育の格差のように感じました。また、ニストスクールのクラス(大体25人)には、5つの民族の生徒がおり、家では民族語、外ではネパール語、学校では英語を使っています。私にとって「民族」という存在が日常的な関心事となりました。



ニストスクールでの修了式ラチェン村の小学校(3年生まで)

ところで、私たちは社会科の教科書でインドのカースト制という身分制度を知りましたが、同じヒンズー教のネパールも同様の身分制度が「創られ」ました。

大まかな歴史は、14世紀頃にインド北部からネパールに移動したアーリア人系(地中海の人)のマッラ王朝がインドのカースト制をもとに身分制度の母体を制定しました。その後、1769年、同じアーリア系のグルカ王朝が多数異民族(約100民族)を征服しましたが、その構成はチベットビルマ系のモンゴロイド諸民族、カトマンズの被征服民族、不可触民でした。その民族系を統治するために、1854年のネパール初の民法典で明確に多数民族を身分階層(バフン、チェトリ、マトワリ(モンゴロイド系)、ナチュネ(ダリット)の4分類)に分けたのです。日本での土農工商(エタ非人)の4分類を想起します。

こうした身分制度については、1963年に法的に廃止されましたが、社会意識的にはまだ存続しています。

私はこの数年、ネパール滞在期間中、意識して身分差別の実態を観察してきましたが、特に感じませんでした。しかし、今回の滞在で、その実態を知ることになりました。

今年の10月に、いつも世話になっている旅行会社のBさんの実家(東ネパール地方)に3日間滞在した時でした。Bさんが帰省したということで、彼の友人が多く訪ねてきました。数人のグループが来た時、我々は庭で食事をしましたが、そのうちの一人は、テーブルに座らず、立っていました。実家の姉さん(学校教師)は友人達に食事をふるまっていたのですが、立っていた人には足元に食べ物が入った皿を置いたのです。私は一瞬なぜかなと思いました。彼はそれを食べずにそのまま持って帰りました。

私がおの様子をBさんに尋ねると、その人はダリット(第四身分)で、今でも我家の中に入らないとのこと。特に、Bさんだけならいいが、お姉さんがいると、彼女には昔の差別意識が残っているので、近寄りたいたいとのこと。

また、Bさんからは、以前、近所の同級生の妹がダリットと結婚して、村中が大騒ぎになり、その2人は村に居られず、10年目にしてやっと、子供も大きくなったので、親も諦め、村に戻ってきたとの話も聞きました。

しかし、最近、村のダリットの息子がカトマンズでブラマンの娘と結婚したので、彼女の家族を連れて戻ってきたとき、村中で彼がブラマンであるように取りつくろったとのこと、意識も随分変わってきたとのこと。

結婚は、通常は同じ民族同士です。最近ではカトマンズなどでアパートを借りる場合、名前で民族が分かり、ダリットの場合、借りられないこともあるので、偽名を使って借りることもあります。異民族間の結婚はこうしたことで拡大しているとのこと。

Bさんも、娘がそのような状況になったら、妻は絶対認めないだろう。自分も親戚のことを考えたら、認めるのは難しいと思うとのこと。

ネパールでは名前で民族・出身が分かるのが、最大の問題だとBさんは言っています。

不思議なことに、カトマンズに戻ると、こうした結婚差別の事例を多く聞くことになりましたが、少しずつ、経済的地位を基準に異民族間の横断的結合が優先されるような意識に変化して来ている事が救いのように思われました。



招待された結婚式

ネパールでの生活(1)(2018.8)

ネパール)島田徹

今年のネパール行きは、これまでと違って「日本語教師」として臨むことになりました。今回から教える対象者もこれまでの小学校 5-6 年生から、日本へ留学する日本語学習者となりました。また、住居も「準ホテル」から、個人の家へ変わりました。個人の家といっても家主はアメリカに移住しており、管理人が家の管理をしています。4 階建てで、延べ面積 800 m²ほどの鉄筋住宅で、日本人から見れば豪邸です。私はその一室を使っていますが、難点があります。屋上のソーラーシステムが古くて、シャワーからお湯がほとんど出ません。洗面器にぬるま湯をためてタオルで拭いています。



家賃はこれまでの 35000 円から 25000 円です。また、食事は、管理人が朝食と夕食を作ってくれますので楽です。食事代は一か月 15000 円ほどです。夕食は一汁一菜に近いですが、庶民の食事なので、これもまた楽です。停電は少なくなりましたが、時々、朝 4 時から 6 時まで停電します。一昨年までは毎日 8 時間の計画停電、昨年は政策転換？で停電がありませんでした。今年は、市民がエアコンや冷蔵庫を買い始めたので停電になっているとのこと。

日本語学校は家から歩いて 45 分かかります。学校と言っても 15 人ほどが入る教室が 4 つと事務室があります。この学校へは週 3 回。授業は 8:30 から 12:00 までです。ボランティアですが、朝食と昼食をキッチンで食べられますので、「元」が取れるようで最高です。よく肉料理(カレーライス)を作ってくれます。別の学校は週 1 回、午前中です。ここは家から 30 分のところ。ここも食事を出してくれますので、問題なしです。「食事を出してくれるならどこへでも」…。ちなみに、現地の日本語教師の給料は、週 6 日(休日は 1 日だけ)で、35000 円ほどです。公立学校の先生は 30000 円ですので、少しはいいですが、かなりきつい仕事だと思います。なお、ネパールでは、ボランティアなら尊敬のまなざしで対応してくれますので、貴重な体験ができます。(為替レートはルピーと円はほぼ同じ)



家の屋上からこの奥が部屋キッチンです

原爆展に参加してネパールでの生活(2)(2018.9)

竹の台(在ネパール)島田徹

ネパールで私が原爆の話をする機会が持てるとは思っていませんでした。

8月7日にN日本語学校の先生から、9日に原爆のビデオ上映をするとの話がありました。この学校では15年ほど前から毎年、原爆の資料展示とビデオ上映をしているそうです。しかも、こうした取り組みをしているのは、ネパールにある500ほどの日本語学校で、この学校だけとのことでした。



8日は、先生と私も手伝って、廊下に原爆資料を展示しました。この資料は、広島原爆資料館からのものです。

9日は学生が25人ほど参加して、原爆の説明とビデオ上映(2本で、50分)をしました。

私は、長崎への原爆投下は「小倉」に落とす予定が、天候不良のため、長崎になったことを説明しました。そして、この時期なると、亡くなった両親がいつも「ここに原爆が落ちていたら、私たちはいない。落ちなくてよかった」と言っていたことを学生に伝え、親の発言について、どう思うかと学生たちに聞かれました。そして、「地震は人間の力ではどうにもならないが、核兵器は人間が作り、なくすことができる」皆さんも「ノーモア広島・長崎」の気持ちを、体で表現してほしいと訴えました。

また、12日には、国立アートセンターで、原爆展があり、その会場にも行ってきました。実は、この原爆展の主宰者は日本人女性で広島出身の方です。20年前にネパールに来て、大学で日本語を教えています。私のエージェントとN学校の先生が、日本語を一緒に学んだ第1期生という関係です。この展示会は15年前から始められたそうで、会場にはM先生の高校生のお孫さんが友人もつれて、手伝いに来ていました。M先生の原爆に対する熱い思いを感じました。

15日の終戦記念日には、学校で第2次世界大戦ではネパールは「グルカ兵」が英国軍として参加し、シンガポールの戦いで、9000人ほどなくなったということを伝えました(WEBにて)。このことは誰も知りませんでした。日本が引き起こした戦争が、まさに世界の国々の方に被害を及ぼしたことを具体的に理解できて、私もよかった思いました。

このように、ネパールで戦争反対を訴える機会に遭遇できたことと、このような努力を今後も続けていきたいとの先生の話聞いて、感謝の気持ちでいっぱいになりました。



展示場



学校掲示板 アートセンター小



日本で話題になっている「留学生」とはネパールでの生活(3)

竹の台(在ネパール)島田徹(2018.10)

最近、三宮や元町に行くと、コンビニの店員の多くが「留学生」のようです。また、どこの駅の前にも「インド・ネパール料理店」を見かけるようになりました。一方、新聞では「外国人留学生の不法就労」などが報道されています。



このような「留学生」が多くなった理由は、政府が、2008年に「優秀な人材確保」として、留学生の入国規制を緩和したためです。その内容は、在留期間の延長、労働時間の週 28 時間への変更(月 10 万円ほど。授業は 1 日 4 時間)などです。このため、母国で日本語を習い、日本の日本語学校で 2 年間勉強し、日本語能力試験の N2,N1(注)に合格すれば、大学・専門学校への進学(留学ビザ)や会社への就職(就労ビザに変更)ができます。この目的のビザが「留学ビザ」です。授業料が2年間 130 万円ほどですが、違法に 2 倍のアルバイトをすれば、何とか授業料の支払いと生活費が確保出来ます。ネパールでは産業がないため、海外で働くのが当然となっており、「海外からの送金」が GDP の 30%もあります。学校の先生の給料が 30,000 円ほどですから、日本への「留学」=「出稼ぎ」が、他の国に比べて魅力的な国となっています。学生街の通りには日本語学校がひしめき合っています。

日本の産業界での人手不足、少子化による学校経営難、そしてネパールと日本のそれぞれの日本語学校の利益が一致している所に、この「留学ビジネス」が隆盛を誇っている理由があります。日本のあるゆる産業分野では、もはや「留学生」の労働力を抜きには成り立たない状況となっています。しかし、本来は、優秀な人材確保の目的とは裏はらに、人手不足を補う「安い労働力確

保」が目的となっています。その中で人権無視の労働実態が新聞などで報道されているのは、その一端を示しています。

日本政府は、こうした実態を改善するのではなく、一層の規制緩和を進めようとしています。一方、昨年から入国を厳しくしてきています。表からわかるように、政府の計画数値をすでにオーバーしているため、入国管理局の審査が厳しくなり、「発給率」が60%程度となってきています。私の学校の学生はとても勉強熱心で日本の大学に進学して、数年働いて、ネパールに戻って会社を起こしたいという希望を持っています。日本の少子化に伴う人手不足は現実問題ですが、いずれ「安い労働力」を確保することも難しくなってきます。今のうちに、こうした外国人労働者を、社会として受け入れ、働きやすい環境を作っていくことが大切だと思います。

(注)N2 は大学・専門学校、N1 は大学院進学程度レベルの日本語能力。

ある学校では 4 月と 10 月期入学生を年間 30 人申請して 20 人ほどが「発給」だろうとのこと。

「留学ビザ」とは別に「技能実習生」という5年間期限付きのビザもあります。

日本の日本語学校も急増し、2018 年 5 月で 643 校あります。



平成29年度	
国	人数
中国	20,166 (29.6%)
ベトナム	14,761 (21.6%)
ネパール	3,372 (4.9%)
インド	2,148 (3.1%)
台湾	1,851 (2.7%)
韓国	1,686 (2.4%)
ロシア	1,343 (1.9%)
アメリカ	842 (1.2%)
フィリピン	583 (0.8%)
タイ	548 (0.8%)
その他	3,483 (5.0%)
計	68,002 (100.0%)



留学生増加

2017 入国留学生

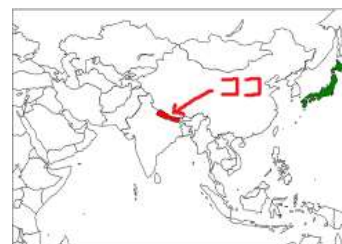
日本語学校だらけ

中国とインドとのはざままで…ネパールのしたたかさ？ネパールでの生活(4)(2018.11)
竹の台(在ネパール)島田徹

ネパールの外交関係は、中国とインドを対象に動いている。悪く言えば両国を手玉に取っているようにも思える。

ネパール人は顔だちからして、インド・アリア系とチベット・ビルマ系の人々が入り混じっている。民族が 130 近くあるとされている。

また、ネパールと両国は、歴史的にもつながりが深い。



まず、中国とは、清の時代 1792 年に、ネパールのシャッハ王朝(1769 年～2008 年)がチベットに侵攻したが、敗れたため、それ以降 1912 年まで朝貢を続けていた。

インドとは、1814 年に植民地支配をしていた英国・東インド会社との戦争(グル戦争)で敗れたため、英国の駐在官を置かれ、事実上英国(=インド)の属国となった。その後は英国のインド支配が終わるまで、属国の地位に置かれた。

文化的には、国民の 80%近くがヒンドゥ教なので、インドとのつながりは深い。また両国間の往来は、事実上フリーである。

このように、ネパールは中国、インドとの関係は昔から深い、その両国の緊張関係に翻弄されてきた。

中国のチベット問題とインドに亡命しているダライラマ亡命政権のこと、カシミール地方とヒマラヤ東部での中印国境紛争など両国間の問題も多い。この両国に挟まれたネパールは、どちら側に立つこともできない。2015年に制定された憲法は非同盟中立が外交方針である。

しかし、両国にとって、ネパールは地政学的にも重要な位置にあるため、ネパールの取り込みに熱心である。

ところで、ネパールでは「統一共産党」が今年の総選挙で安定的政治勢力になった。ネパールに「共産党」が存在しているのは、旧王朝が、1950年代に王朝政治に批判的なインド系の国民会議派の対抗策として、共産党の運動に寛容であったためとのこと。

現在の共産党政権では、中国寄りが明確になってきたため、インドも負けじとネパールとの関係強化を打ち出している。例えば、中国ラサからカトマンズまで鉄道延長事業が進められているが、ヒマラヤの下をトンネルで結ぶという。そのため、インドも鉄道をカトマンズまで延長すると発表し、具体化を進めている。水力発電も両国からの投資と合併会社の話がいくつもある。

この両国を手玉にとって事業を進める方策はこれまでも進めてきたが、政権が6か月ごとに代わる不安定な政治情勢から具体的に進まなかった。しかし、今の政権がどのようにネパールの発展のために政治を進めるのか、国民は期待と不安を持って見ている。

しかし、気になるのは、いつまで安定した政権が続くのか。また、今の中国とインドの関係は経済的つながりが深くなってきており、両国を手玉にとって成果を誇示する旧来式の交渉でなく、ネパール自身の頭で経済発展の方向性を作り上げなくてはならない時期になっていると思う。

(注)・ネパールの国民所得は、アジアで最下位の年700ドル(世界銀行調)。その上位にカンボジア、バングラディシュ、ミャンマーが続く。

被爆「ハマユウ」がネパールにも！ (2019 . 10)

竹の台島田徹(在ネパール)

私がボランティアをしている日本語学校が、毎年 8 月 6 日に原爆展をしています。学生が毎年変わりますので、同じ展示物やビデオでも全く問題ありません。彼らにとっては、新しい体験であり、学校がこのように継続的に開催していくことは本当に意義があると思います。私も原爆のことを話す機会がありますのでうれしく思っています。ここの校長は、今、ネパール日本語教師協会の役員をしていますので、こうした取り組みが他の日本語学校にも広がっていけばいいなと思っています。



また、ある大学の日本人の先生はネパールで毎年 8 月に、個人的に原爆展を開いておられますが、今年は中学校での開催となりました。昨年は、アートギャラリーという国立の施設で開催しましたが、今年は、在ネのフランス大使が原爆展に興味があつて、見学したいとのことで、結局、中学校で 1 日の開催になりました。

この学校では原爆について事前学習をしたそうで、当日は、展示物やビデオの上映、折鶴教室、原爆関係の本の読書室が用意されていました。また、校庭の隅には広島で被爆したハマユウ(浜木綿)の子孫が植えられていました。このハマユウの花は 2015 年に起きたネパール地震の後に 15 日間咲いたそうです。私はネパールで、ハマユウは「逆境に強い花」ということ、また、花ことばが「あきらめない気持ち」ということを知り、この花が自分にぴったり?のように思えて、この花が好きになりました。この学校には以前、日本人教師がいて、平和教育を行っていたようで、その方も今回の原爆展に招待されて来ておられました。やはり、この先生も団塊の世代の方でした。

恥ずかしながら、こちらに来ていろいろと勉強させられている状況です。

(この被爆ハマユウの品種は実際はインドハマユウというもので、花も百合の花とそっくりです。被爆ハマユウについてはこちら)

(明るい街に)

神戸市の「都市空間向上計画」って何??(2019.8)

竹の台島田徹

昨年の 3 月に神戸市が発表し、この 6 月!!に、具体的内容(案)が明らかになりました。

驚いたのは、西神 NT のうち、春日台と櫻野台のほぼ全域、狩場台の半分、美賀多台の一部が「居住誘導区域外」に指定されていることです。神戸市は、7 月 9 日に西区民センターで説明会を開催しましたが、このような説明会は市内全域でわずか 8 か所です。説明会の参加者は、「市民



がこの計画を知っていると思うか」「まず小学校区ごとに説明会をすべきだ」「土地の下落化は財産権の侵害」との意見が相次ぎました。

この計画は、国が将来の人口減少を理由として「都市再生特別措置法」によって、駅周辺とそこから徒歩 20 分までの区域を「居住誘導区域」に指定し、そこに民間・行政サービスを集中するという「立地適正化計画」です。また「居住誘導区域外」から民間行政サービスをこの区域に誘導するものです。

ところが、神戸市は、国の「人口減少対策をしない場合」の推計値を採用して、50 年先に 154 万から 110 万人に減少するとして、国の「立地適正化計画」を「都市空間向上計画」に改称し、さらに「居住誘導区域」を「駅周辺居住区域」に、「居住誘導区域外」を「山麓・郊外居住区域」に改称しています。この計画の本質である居住誘導区域外の民間・行政サービスを駅周辺に誘導して、居住誘導区域外は空き家を進めるという内容を「言葉の変更」で分からなくしています。

すでに、不動産の HP には①土地価格の下落化②空き家の増加③民間・行政サービスの撤退が進むと書かれています。これによって、西神 NT 全体の活力が低下するのは明らかです。区域内と区域外を明確にするのは、区域外の住宅地の開発には届け出の義務が発生するためです。

フランスの出生率が 1994 年 1.66 から 2010 年には 2.00 に上昇したのは、保育システム、学費無償化などの仕組みがあるためです。まさに人口減少という課題は国のお金の使い方次第で解消できる問題です。

「西神 NT9 条の会」の活力低下？に歯止めをかけるためにも、この問題にかかわる必要があると思います。8 月 8 日までに意見を出しましょう。

(読んだ見た聞いた)

ミサイルでコロナを滅ぼせる！？

—中村医師「良心の実弾」ビデオを見て (2020 . 8)

竹の台島田徹

先日、中村哲医師の「良心の実弾」のビデオを見た。九州朝日放送が放映したものであったが、これを見て本当に心が打たれた。



中村医師が1984年にパキスタンのペシャワールで干ばつに苦しむ貧困層の医療に取り組む。それを支える団体が NGO ペシャワール会とのこと。彼は医療活動をする中で、貧困をなくさなければ命が救えないことを体験し、その後、医療活動から民衆が生きるための生活基盤を作り始めた。砂漠に灌漑水路を引くため、みずから建設機械のレバーを握り、民衆と一緒に働く姿に感動した。こうして完成した

用水路の周辺は緑豊かな耕地となっていく。しかし、2019年12月に水利権をめぐる争いから、理由はわからないが、車で移動中の彼と同乗者が銃弾に倒れた。

中村医師は灌漑用水路を建設する中で「戦争をやめて用水路を作ろう」と戦争を続ける勢力に呼びかけていた。そして、日本人には“戦争の無力さと日本国憲法の9条を絶対守らなければならないこと”を強く訴えていた。中村医師は、厳しい自然との闘いの中で、戦争の無益さと世界での貧困の格差を痛感していたのではないだろうか。今また、アフリカ、中東そしてインドにまでバッタが異常発生し、農作物に甚大な被害をもたらしている。中村医師が尽力したアフガニスタン、パキスタンは？と思うと心が痛む。

今、コロナウイルスが世界中に蔓延し、感染者は1600万人、死亡者は60万人を超え、有力な対策が見い出せていない。人類の危機ともいわれる中で、各国は今こそコロナ対策で手を結ばなければならない。しかし、アメリカと中国はこれまで以上に敵対関係となり、世界を分断している。安倍政権は、このアメリカに追従して、武器の爆買いを続け、「敵基地攻撃能力」を保有しようとする動きを強めている。

これは中村医師の平和の願いとは全く逆の姿勢である。こうした戦争礼賛の安倍政権に「ミサイルで、コロナを滅ぼせる！？」と戦力の無益さを訴える「良心の銃弾」を打ち込もう。

「奇跡の街合唱団」のコーラスミュージカルを見て

……故中村哲医師の遺志を継ぐとは……

島田(竹の台)

当会の4月23日、第14回記念のつどいでは、ペシャワール会の藤田氏が「百万の銃弾より水を！」と題して、中村哲医師の足跡を講演しました。

つどいにはペシャワール会員の方が20人ほど参加され、その情報発信には「奇跡の街合唱団」(壇美知生氏主宰芦屋市)が大きくかかわってくれました。団員も6名が参加してくれました。壇美知生氏が中村哲氏と高校の同級生ということもあって、合唱団はペシャワール会の活動を支える活動も行っています。

この合唱団のコーラスミュージカルが7月18日芦屋ルナホールで行われ、会場はほぼ満席でした。(5~600名くらい?)壇氏からの案内チラシもあって、私も参加し、ただただ驚くことばかりでした。

まず開場前には外に100mほどの人の行列で、参加者には子どもたちも多かったです。

コーラスミュージカル「魔法の森―夢の片隅の物語―」のあらすじを紹介します。

魔法の森の泉が枯れたため、困った王様や魔女たちが、人間社会に異変ありとして、その原因究明と解決策を持った人間探し(夢持つ人間探し)の旅に出る話です。

第1部は人間社会の問題として、三話取り上げ、①母子家庭の苦悩から母親を救い、子どもたちの夢を引き出します。医者になりたい、看護婦になりたい②永田町の役人(青木さん)が上司から「文書改ざん」を迫られる場面に出くわしますが、彼らに正義と勇気の心を取り戻させていきます③みかんの丘にたたずむ老人から、長崎で被爆をうけ悩み苦しんでいる話を聞く。どのように若い世代に継承するのかと。ここでサー口節子さん(そっくりさんが演技!)が登場して、核兵器廃絶を訴える。また、ロシアによるウクライナ侵略の現実、核兵器の廃絶と平和的話し合いで解決をとの訴え。(HP から別の公演シーンですが、このような雰囲気)



(HP から別の公演シーンですが、このような雰囲気)

第2部は、中村哲医師の歩み。主にアフガニスタンでの診療活動や「命の水の用水路」作りの36年間の物語。この期間はソ連の軍事介入(1979~1989年)とその後のアメリカによる20年間(2001~2021)にわたる軍事介入の中で、黙々と用水路作りに地元の人と一緒に汗を流す中村医師の姿を映像で紹介。気候変動による干ばつも。合わせて舞台では、中村医師が国会で証人として「自衛隊派遣は有害無益」と証言。周りの議員から「取り消せ」のやじ! 然し動じない中村さん。(※同時多発テロが起き、自衛隊による後方支援を可能にする法案審議の為)この証言の後、パシワール会には寄付金申出の電話が殺到!(暗転) エピローグこんな日本、世界、100年後どうなるのかを問う。「今なら間に合う」「夢を持つ人間を信じて」...

少々長い説明になりましたが、感想は、一言でいえば、社会問題をファンタジーな物語の中にとり入れ、それをコーラスミュージカルとして観客に問いかけ、観客にとって考えさせられながらも勇気が湧いてくるものでした。

ここで提起された問題は今の日本では現実的なものばかりです。文化活動にもいろいろな立場での表現の仕方もあるでしょうが、大体において、周りの雰囲気に合わせて内容であると思っていました。しかし、ここは違っていました。違っていたと感じたのは、文化活動というものを理解していない自分とどうしてこのように社会的問題を率直に文化活動の中で表現できるのか……

この合唱団の団員募集の参加資格に①歌が好きな人、被災者などの弱き立場の人を音楽で支援したい人。②ペシャワール会でのアフガン支援に協力したい人とあります。

中村医師はハンセン病に苦しむ人たちや干ばつ・戦争によって、避難生活を余儀なくされた人々と接する中で、一人一人に親兄弟と家庭があり、誰一人見捨てられる人間はいない、命を守りたい、生活できる環境を作りたい、この信念と実行力を示しました。中村医師のこの強さが人間として、夢を持つ人間として、この劇で謳われたのでしょうか。

中村医師の言葉、『議論より実行』。議論先行では何も変わりません。弱者に寄り添った実行力でこそ誰はばかることなく社会問題も自信をもって、世に訴えていける。「奇跡の街合唱団」は、そのような遺志を継いでいるように思いました。

なお、次回企画予定として、ペシャワール会支援室長「藤田千代子氏講演会」と中村哲医師の愛したモーツァルト歌曲・平和と愛のオリジナル曲の音楽のステージとなっています。日時場所は未定ですが、興味のある方は HP をご覧ください。#奇跡の街合唱団

(エッセイさまざま)

ネパールにも9条の会の旗が！！(2014.12)

竹の台島田徹

私は、9月19日から11月2日までネパールの登山に行ってきました(めざした山写真右6246m)。3回目となる今回は、兵庫の勤労者山岳会の仲間4名と一緒に、西北ネパールにある6246mの未踏峰の登頂を目指しました。しかし、たまたま、記録的な大雪に遭遇し、登山装備が雪崩で流されたため、登山を中止せざるを得ませんでした。(日本大使館員の話ではこの大雪でネパールでは45名が死亡(2名は日本人)したとのこと)



ところで、登山のためには前半のトレッキングで高度順応を行います。トレッキングといっても隊員5名、シェルパ、コックなどのスタッフ4名、ラバ25頭、その馬方が6名、総勢15名の陣容によるキャラバン隊です。途中はほとんど人に会わないため、ヤクや山羊の放牧地にいる現地の方に、山羊を譲ってもらい、肉の補給をするなど、いろいろと貴重な体験をしました。

この大雪のお蔭？で、1週間早く日程が短縮できたため、首都であるカトマンズへの帰路の途中、ブッダの生誕地として知られ世界遺産に登録されている「ルンビニ」という街を訪れることが出来

ました。ここには、生誕地の記念館、アショカ王の記念塔のほか、世界の寺院などが広大な「ルンビニ園」に整然と配置されています。日本のお寺は「日本山妙法寺」があります。この寺はブツダ記念館と対極という重要な位置(3kmほど離れているが)に配置されています(写真左下)。折角なので、お参りに行ったところ、驚いたというか、うれしいというか、このお寺の入口に「日本山妙法寺 9条の会」の旗が両側にありました(写真右下)。

この寺は、以前、国民平和大行進では、太鼓をたたきながら一緒に歩いていたお坊さん達の所属寺だったと記憶しています。

しかし、ネパールに9条の会の旗が・・・これまで、私の頭の中は、登山だけの世界でしたが、ネパールのこの地で、突然、世界平和の世界の中に引き戻されました。

思いもかけない体験をしたネパールの旅でした。



3年ぶりのネパール

まずはコロナの洗礼から・・・顛末記(2022.10)

竹の台島田

ネパールには、これまで、登山やトレッキングを目標に行き始めたが、完全退職後は日本語教師のボランティアもしながら継続してきた。2015年のネパール地震での被災地ボランティアやカトマンズで原爆展の手伝いなどなど、結構することが多くあって、時間が足りないくらいだ。今回は3年ぶりのネパール行きとなった。3年間で何が変わっているかな？と想いながらネパールの地を踏んだ。

最初の1週間はいろいろ準備や整理で忙しく、疲れ始めていた。そのような中、17日(土)午後から日本語学校の女生徒を引率してネパール日本人会主催の盆踊り大会に参加した。帰りの時、熱を感じていたがまさか・・・

自分の部屋(旅行会社の倉庫の一部を改造している)に戻って体温を測ると38.2度、のどが痛い。18日(日)、19日(月)も同じ状態。持参した薬を飲んでしたが、状態は変わらず。授業日の20日(火)には、身体がしんどいが、状況報告に行った。すぐ家に帰って近くの外国人専門病院に行くこ

とにした。これには、旅行会社のラナさん(日本人向け旅行会社なので日本語がペラペラ)が同伴してくれ、私は今まで一度も病院に行ったことがなく、風邪によるのどの痛み程度しか思っていなかった。費用のこともあまり気にしていなかった。診察を受けると、コロナの検査をするというではないか。ええー、4 回目は先週済ませてきたのに！風邪じゃないの？

ベッドに横たわりながら、今年の春、友人がネパールの登山中、コロナに罹り、入院費用が9日間で110万円かかった話がよみがえってきた。(保険に加入していなかったので自腹・8000m級の登山保険料は30万円ほど、以前私の低い山で 23 万円だった)。もしもコロナだったら、入院させられるのではないかと。自宅待機で十分だと主張する気持ちで身構えていた。コロナの患者はネパール全体で毎日 200 名前後で推移しており、危機感は薄れている状況だった。

ラナさんが「コロナに罹っている、10 日間自宅待機」との報告に来た。「自宅待機」と聞いてホッとした。3 日ほどで回復し、その間ラナさんが食事などを運んでくれて大変お世話になった。

ところで、ネパールに到着してまず、注意を受けたのは、「デング熱」だった。デング熱は蚊を媒介にして高熱が出る病気で死亡までは至らないとのこと。2019 年の流行では 18,000 人が罹り、6 人死亡だったが、今年はすでにカトマンズを中心に 3,000 人が罹っており、以前のペースを上回るのは必至とのこと。確かに、2019 年の時、消毒液を担いだ数人の人が周りを消毒して回っていた。これはデング熱とは関係なかったかもしれないが・・・とにかく私は室内でも蚊に刺されないように、長そでシャツ、長ズボン、靴下をはいている。このようなことがネパール発第 1 報となった。



ご満悦の私が一転・・・

3年ぶりのネパール

ネパールのこの 3 年間で変わったこと・・・(2022.11)

竹の台島田

前回は 2019 年 11 月に帰国しましたが、その後は、コロナのため行けず、この 2022 年 9 月に入国しました。この 3 年間で何が変わったのか、紹介します。

1日本語学校の様子は・・・

例年、どの国でも日本語学校は10月入学期と4月入学期に合わせて、留学生を送っています。彼らは1年間もしくは半年間くらいの授業を受け、N5という日本語能力試験(N5~N1、世界中で年2回実施)に合格しなければなりません。ところが、コロナの影響で、2020年4月入学から2022年4月入学までは日本の入国制限のため、ほとんど留学生を送れませんでした。しかし、今年の8月から入国が大幅に緩和されたため、それまでの待機組の学生が日本へ入国可能となりました。そのため、日本へのビザのオンライン申請(2021年4月から日本大使館業務を民間会社に委託した)が一斉となり、パンク状態となっています。他国からは申請がしやすいとのことで、日本の知り合いに頼んだりもしています。受入れ側の日本の日本語学校にとっても財政的に影響が大きかったようです。今後は、この状態は解消されていくとのことです。学生のほとんどが借金をしているので、早く日本に行かなければなりません。日本でのアルバイトが当面の目標ともなっています。

2円安・ドル高の影響は・・・

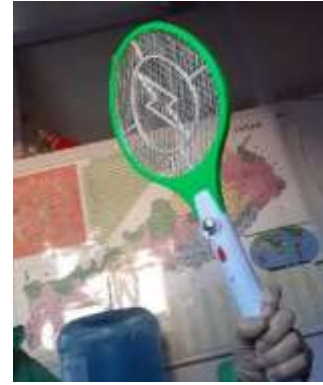
ネパールは輸入経済で、製品(食料品から電化製品まで)の7割までが外国からの輸入品で、ほとんどがインド製か中国製です。したがって、ドル高の影響を直接受け、価格が値上がりしています。ちなみに私の好きなスニーカーも20Rsから25Rsになっていました。ネパールは外国からの援助金とGDPの3割を占める出稼ぎ先からの送金で成り立っているのが実情です。出稼ぎ先からの送金には預金金利も優遇されています。なお、子ども3人のうち2人は外国で働いている状態で、彼らは英語ができるため世界は一つの感覚です。

しかし、コロナとドル高によって、働く機会の喪失と外国での賃金も相対的に価値が下がり、外国送金額が減っています。私が世話になっている「TAROTREK」旅行会社では、この急激な円安による影響を直接受けています。日本からの旅行代金(10日間7人)が、3月に契約した時、1人30万円=2542ドル/118円/ドルだったものが、10月時点で1ドル145円=368,500円(2割アップ、日本円での契約がほとんど)となりました。これでは赤字となり、しかも7人分なので損害額も大きくなります。この事情を、お客さんに説明するのに苦労したとのことです。このままでは日本からのお客さんは来ないだろうと悲観しています。この円安の影響は、外国からの部品調達に依存している日本の中小企業は、同様な苦境に陥っているのが実情だろうと思います。

3日常生活では・・・

●私が住んでいるのはネパールの中心街なのですが、車とバイクがますます多くなり、歩くのがこれまで以上に危険になっています。相変わらず埃の多さにはあきれいています。できるだけ窓を開けないようにしています。

●また、コロナだけではなく、デング熱が流行し、周りの人たちが次々に罹患しています。インフルエンザ程度らしいですが、蚊対策のグッズを貸してもらいました。テニスラケットくらいで、面に電流が流れるので、これで虫を追いかけてまわしたら効果抜群。当たれば「バチッ」と気持ちいい音がします。(笑)



●停電は 2017 年まで一日に 8 時間の計画停電でしたが、2018 年から全く停電がなくなりました。民生用を優先したとのことでしたが、今回は朝方に 1 時間程度よく停電があります。生活水準が上がってきているのだらうと思います。ちなみに、私の大家さんの家にはすべての電化製品が揃っています。

●カトマンズの水不足解消のための水道事業がまだ完成していませんでした。当初 5 年計画が 30 年もかかっています。2015 年の時、工事関係者からもうすぐ完成との話を聞きましたが…。水事情や電気事情などの話は、書ききれませんので、この程度で。

●TARO トレック事務所(一部に私の部屋がある)の前に 2019 年完成の大きな複合ビルがありますが、その中に外国へのビザの交付窓口(日本大使館の分も)が出来ましたので、その関連事務所も多く開設され、人の出入りが極端に多くなっています。そのため、狭い道路は車とバイクと人で大混雑。ガードマンが見境なく、一日中、笛を吹き続けていますので、うるさいこと、この上なしです。

4 政治経済関係…今回は簡単に(次回に詳しく)

ネパールは中国とインドに挟まれ、その両国とどのように付き合っていくかが昔からの課題です。憲法上、非同盟中立となっています。以前にも書きましたがこの両国を手玉に取って、経済援助をどれだけ引きだすかが、大国に挟まれた小国の生き延びる策なのでしょう。特に中国の経済援助が私の目には映ります。中国側からネパールへの道路の建設(4000M 級の峠を越えての道路建設は大きなブルドーザーで山を削っていました)、ネパール地震の時の世界遺産の修復はアメリカとの競争でした。大水力発電所の建設や鉄道の建設計画など積極的です。インドもこれに負けじと経済援助をしています。ただ、ネパールの輸出入の大半はインドで、インド系ネパール人も多く、文化的な共通性を強調しています。インドとはパスポート、ビザなしで自由に入出入りできますので、多くのネパール人が働いています。

しかし、ネパールはこれまでもインドの半植民地的な位置に置かれてきたため、インドへの警戒心が強いようです。政治的には大体、インド寄り与中国寄りの政権が適宜交代しているようです。しか

も連立政権ですので不安定です。今は、地政学上も重要な位置にあるネパールに、アメリカも援助を強めています。

今回、目新しいのは、ネパールの領土が地図上で増えた事です。少なくとも40年ほど前からは地図上に記載されていなかった部分が、2020年から地図に記載されることになりました。また、11月20日には国政選挙があり、その後の動きが注目されています。



(新) 左上の角の部分 (旧)

この他にも、難民問題などあります。

3年ぶりのネパール

チベット難民とネパール

島田徹(竹の台)

2022年11月8日から13日までの日程でランタン・トレッキング(標高3400m)を行いました。

本来の目的は、ネパール大地震(2015年4月25日)の震源地に一番近く、被害も大きいと聞いていたので、その後の状況を見ようと計画しました。しかし、このトレッキングで別の興味深いものもありましたので、「チベット難民とネパール」として、感想を伝えます。

このランタン地方はカトマンズの北約100キロの所に位置し、中国との国境検問所(ラスワガリ)もある山岳地帯です。1970年代に「世界で美しい谷の一つ」と紹介されたため、それ以降に外国人が訪れ、特に日本人が多かったとのことです。この地域にはタマン族が昔から居住しており、世界遺産になっている場所もあります。

このコースの途中のラマホテル(lamahotelという地名、15軒ほどの宿泊地)という場所で、行きと帰りの2回、同じゲストハウス(Tibetguesthouse,簡易宿舎で日本の山小屋程度)に宿泊しました。夫婦と使用人1名で経営していますが、収容人数もガイドポーターを除き、お客は10人程度なので運営ができています。このトレッキングコースの住民の苗字はほとんどタマン族のタマンとなっており、本人たちもタマン族と言っていました。しかし、顔だち、服装からしてどうも隣のチベット人の雰囲気です。どうしてだろうと疑問に思い、この夫婦に聞いてみたいと思いました。聞きたいことはガイドのビシャルさんが通訳してくれ、彼はネパールの歴史やいろいろなことに精通しているので、安心です。

翌日、朝食をとりながら夫婦の歴史を聞きましたが、その内容は次のようなものでした。……

1956年、中国軍がチベットに侵攻し、家は焼かれ、両親と7歳の自分はこのランタンから西北に約200kmの中国との国境である峠からムスタン王国(当時ネパールの自治国で2008年ネパール王国とともに消滅)を経て、このランタン地方に逃れてきた(馬に乗って)。この峠は、子どもでも通過できるので、多くの難民はこの峠を通過した。兄はラマ14世と一緒にインドに逃れたが、その後の消息は不明。このランタンにチベット難民キャンプができ、その後、私と友人のラマはラマホテルを建てた。当時一軒しかなかったので、ここの地名がラマホテルとなった。しかし、1972年頃、ネパール政府から国立公園内なので、難民キャンプ住民は移転させられた。その際、ラマホテルは5000Rsでグルン族の人に売った。移転先はポカラのパクレチャンゴ、近くのtrishuri、カトマンズのjorpatiの3つの中から、私はカトマンズに行った。そこで、国籍をもらい、この地に戻ってきた。地元の役所で名前を登録する時、この地方はタマン族が多いので、タマンの苗字になった。妻は、近くのシェルパ・ガウンの娘だった。このゲストハウスは1980年に建てた。当時は日本人が多く来てくれたが、最近は滅多にこない。どうしてだろうか。息子は、オーストラリアで仕事をしている。……(以上のとおりです)

ご主人は、チベット語、タマン語、ネパール語、英語での会話が出来ます。しかし、チベット文字しか読み書きができません。したがって、食事の注文書には、大体、英語文字で書かれるので、その文字を読んでもらい、それをチベット文字で自分のノートに書いています。朝食を作る時、自分のノートを見ながら作っていました。



奥さんは、昨日の夕食後にダライ・ラマ14世(インドにあるチベットの亡命臨時政府代表)の説教をインターネットで観ていました。奥さんはチベットに戻りたいと言っていました。奥さんはシェルパ村の娘と言いましたが、実際はチベット難民で、住民登録の時にタマンと同じく、山岳民族であるシェルパ族の名前をつけられたのではないかと、村の名前も同様ではないだろうかと思いました。シェルパ族の宗教はチベット宗教ですが、帰属意識はネパールです。昔の国籍作成の経過はいい加減で、ムスタン王国の場合は、チベット難民をすべてスードラ(カースト制でバウン、チェトリ、バイシャ、スードラの順)の身分に位置付けたとのこと(ビシャール言)。



ネパールでは1951年に教育省(ラナ専制体制から王政復古となる年)が出来るまで、一般の教育制度はありませんでしたので、60歳台以上の男性、50歳台の女性は十分な義務教育を受ける機会がなかった。こうした事情から文字の読み書きができなかったのだらうと思います。

なお、ご主人は、私と同じ年齢で、日本人と顔立ちが「セიმ、セიმ」なので自然と仲良くなりました。ところで、私が 2013 年に登山のために訪れたチベットは、大きな縦貫道路と中国人移民団地が至る所にできていたことに目を見張りました。また、町のビルは「〇〇省の寄贈」との銘版が貼ってあり、全国からの寄贈で建てられていました。町にはチベット人はあまり見かけることはなく、漢民族が多く見受けられました。同属民族の人口増加が将来の所属の決め手となることを見越してのことだろうとその時感じました。何故なら、移民団地の建設は旧日本軍の満蒙開拓団と同じ手法です。私はこの関連業務にかかわったことがありますので、その思いを強くしていました。



今年、中国使節団がネパールに来て、経済援助の約束をしました。その中の1項目にチベット人による反中行動を取り締まることなどが挙げられていたことに、この問題がまだまだ中国政府にとって大きな政治課題となっていることが分かりました。

いずれにしても私がこのランタン・トレッキングで知ったチベット難民の一場面は以上の通りでした。

(注)

1. 「チベット難民問題」(wikipedia)は、中国政府、亡命政府の主張を比較して記述している。
2. 1960年に「中国ネパール友好条約」を締結し、チベットが中国の一部であることを確認。1961年、両国間の国境を画定した。その後、チベットからの難民を受け入れず、第3国への移動を認める旨、国連と覚書

3年ぶりのネパール

ラチェン村、三度目の訪問・・・過疎化の進行

島田徹(竹の台)

2022年11月8日からのランタン・トレッキングが終わった13日(日)、最終地のシャブルベシからカトマンズの帰り道にラチェン村を再訪しました。この村は2017年10月と2019年8月の2回訪れています。

1回目は、ネパール大地震(2015年4月25日)後に、ビシャルさん(私がお世話になっている旅行会社)を通じて西宮のボランティア団体が災害支援をしているという村を見学すること

になりました。私は現地の皆さんの話を聞く中で、10日間、仮設の家の横にテントを建てて、ボランティア活動することになりました。この期間中、稲刈り、道路の補修、草刈、魚とり、近くの小学校での授業等をする中で、村人とも親しくなりました。この経験が私のその後のネパールでの活動の糧になりました。2回目は3日間の表敬訪問で、しかも雨期の時でしたので、屋外での作業もできませんでしたが、温かく迎えてくれました。この村を今回訪問し、皆さんと再会できることを期待していました。

私たちはシャブルベシからバスで Trishuri の手前の Betrawati まで行き、そこからジープに乗り換えて村に行くことになりました。カトマンズから迎えに来てくれたジープの運転手はこの村の方で地震でお母さんを亡くしています。とにかく道路には標識がありませんので、村の関係者でないと村にたどり着けないとのこと。到着するまでの経路を見てなるほどと思いました。

Trishuri 川の支流である sidure 川をさかのぼっていくと川の周辺は稲が刈り取られ、次の耕作のために牛糞と鶏糞が田畑に積まれていました。自宅での肥料とすることで、自然農法そのままです。ジープが登りになり、しばらくするチャトラレというバス停に着きました。以前はここで、カトマンズからのバスを降りて、30分ほど歩いて下ればラチェン村でした。

しかし、ジープがそのまま道を下っていきます。以前はガタガタ道でバイクが何とか通れる状況でした。雨で道が崩れバイクが通れなくなったため、私も道路補修をしたことがありました。今回は、その道が少し広くなっていましたが、運転を誤ると道路を滑り落ちる状態でしたが、運転手を信頼する以外にありません。最初に着いたところが小学校。と言っても100㎡ほどの1クラスの平屋。何とそこは草茫茫となっていました。子どもが少なくなり、ここから歩いて1時間ほど登ったところの小学校に統合されたとのこと。ここで授業したことを思い出します。車はここからしばらく両側から伸びた草の中を進みます。以前はきれいに整備されて、歩きやすかった道でした。しばらく進んで到着したのが、昼食を準備してくれている家でした。



この家には両親と息子、娘2人の5人家族。息子のスジャンは小6年生で、今日は仕事の関係で休んでいるとのこと(ネパールは土曜だけが休みで日曜日は登校日)。私はこの子を覚えていて、彼も私を覚えてくれていた。娘の一人は学校に行っている。もう一人はヤギの世話で、出かけているとのこと。子どもの教育より家庭の事情が優先しているのが実情です。ご



主人の顔も見覚えがありました。2017年、稲刈りの脱穀の時、大きなザルでもみ殻を落としていた人で、顔だちがチベット人風で、ちょっと他の方と違っていました。この家は、震災後、国から支援金 30 万 Rs をもらい、自分で建てたとのこと。着工時に 5 万、検査(鉄筋が入っているかどうか)後に 10 万、完成後に 15 万受領。ここは 2 階建てになっているため、延べ100㎡くらいでしょうか。

家族と一緒に昼ご飯を食べましたが、鶏の肉の御馳走でした。田舎ではなかなか肉を食べることが出来ませんので、私たちのために準備してくれたことに感謝しました。お土産にサトウキビを切り取ってくれましたが、私は試食のため皮を歯で剥こうとしましたが、硬くて剥げませんで



したので、皆で大笑いしました。隣の倉庫には、どぶろくの作り置きがあり、お土産に少しもらいました。

ビジュアルさんの訪問目的は、西宮のボランティア団体が震災後に新築した家にトタン屋根(平均で 10 万円、合計 150 万円ほど)を支援したので、その様子を改めて会の皆さんに報告したいとのことでした。

しかし、支援した家のほとんどが空き家かなと思われるほどに、家の周辺は草が茫々になっていました。様子を聞くと、今は農作業で出かけているので鍵がかかっているとのことでした。地震後に再建した家は13戸あり、トタン屋根を支援したのは11戸。この11戸を今回調査しましたが、2戸は既に空き家となっており、子どもがいるあの1戸を除いてすべて老人世帯になっているとのことでした。移転した理由は、カトマンズ(車で4時間ほど)に息子たちがいるためと、近くの町が便利とのことでした。この空家の家では前回、バナナが多くなっており、それをちぎってもらったことを思い出しました。

以前の状況は、まず家があり、その少し上の所に牛がいて、家の前にヤギと鶏がいて、その横にバナナの木があり、その下に畑があります。これで堆肥が自然に下に流れだし、果物、作物もよく生育し、バナナはたわわになっていました。何と自然と調和した村だろうと感心していました。……しかし、数年後の現実、私が前回お世話になったディディ夫婦のように、歳をとると、牛やヤギのエサの刈り取り(毎朝夕にそれぞれ1時間ほどかかっていた)が出来なくなり、牛・ヤギを飼えなくなりました。したがって周りは草が多くなった。たとえ家族からの送金があっても、歩いて1時間ほどで、しかも山道の生活圏では年寄り夫婦にとっては住めない状況となっている。この付近で子どもがいて、牛を飼っているのは昼食を食べた1戸だけだった。あと5年でこの村も消滅するかもしれない。……あまりにも急激すぎる村の変化に一抹の悲しさを感じた訪問でした。

ネパールで11月20日に実施された国政選挙ではどの政党も過疎化問題に触れていないとのビシャルさんの言。この村の現実をボランティア団体(以前訪問したことがある)にどのように伝えたいのかビシャルさんと相談しています。



ネパールの国政選挙の様子とその結果に思う

島田徹(竹の台)

ネパール滞在中、11月20日に実施された総選挙(両院制で今回は衆議院定数275小選挙区制165、比例代表110)の様子を見る事が出来ました。選挙運動の様子と選挙後の政治状況について、紹介します。

「おもしろい」選挙運動と投票当日の様子

1選挙運動の様子

①選挙宣伝カーは、2-3台が連ねて、候補者の写真を張り付けて、ネパール音楽を流しながら走る。候補者の連呼や政策は訴えていないようだ。

②バイク20台ほどが旗を立てて走っていた。

③候補者と支持者50人くらいで拠点を練り歩いていた。

④投票場を本籍地から居住地に移転するには、15年以上居住し、自宅を所有していないと変更できない。そのため、投票のために実家に帰らざるをえない。カトマンズでは多くの人が投票のため帰省する。その場合、候補者の中にはカトマンズから自分の選挙区までのバスを用意し、昼食券往復分2枚用意するボランティア活動?をしている。そのため、議員中に選挙費用を作るため、「賄賂」が必要とのこと。

⑤特に田舎では、飲み食いが常識となっており、一種のお祭りのようだ。車の荷台に人が一杯に乗って、村中を走っている光景も見た。しかし最近、費用が掛かるということで、投票日3日前から選挙活動の禁止、酒類の販売禁止(選挙関係)が取り決められたとのことだが…



私もネパール人！
頑張ってください！と



私の部屋からの風景、お祭りのようです！

2投票場の様子

①投票場には警察官(選挙のための40日間臨時警察官)が入場券をチェックする。投票場の襲撃や候補者が殺されることもあるので、投票場付近には武装警察官が銃を構えている風景も見かけた。

②投票用紙は、各政党のシンボルマークに印をつける方法で行われる(田舎の60歳以上の方は、子どもの頃、教育を受ける機会がなかったため文字が読めないため)。また、2重投票防止のため、爪に消えないインクをつける。

③投票結果は2週間後くらいに確定する。その後、与野党間で新政権のための交渉が始まる。そして今回の政権は…



ネパール外交の「したたかさ」!

選挙結果と政権について日本でも次のよ



うに報道されました。「ネパールでは共産党毛沢東主義セクター(CPN-MC)のダハル議長が首相になった。それまで与党連合内であったダハル議長と最大政党ネパール議会党(NC)との間で首相の座を巡っての交渉が決裂。ダハル議長が与党連合を離脱し、野党と組み、過半数を得て首相になった」との内容です。

交渉の内容は、ダハル議長が、これまでの連立与党政権の継続ならば、任期5年間の最初の2年間の首相の座を要求したが認められなかった。そのため与党から離脱し、それまでの野党(中心は、統一共産党CPN-UML(オリ党首))との連立で首相の座を得たものです。また、ダハルとオリとの話し合いで、最初の2年半がダハル、後半の2年半をオリが首相となることになった。

ダハルは、これまで2008, 2017、今回で3回目の首相となります。オリも2回首相となってい

ます。つまり、2008年にネパール王国から共和制になった以降、25年の間にダハル、オリの「中国寄り政権」が5回と、ネパール議会党の「インド寄り政権」が5回で、交互に政権の座についています。つまり過半数を超える単独政党がないため、5-6党の連立政権が2-3年ごとに交代したことになります。(今回議員275名中7党連立与党169・ダハル毛派32オリ統一共産党78国民自由党20その他39/野党106・議会党89統一社会主義党10その他7)

ネパールは中国とインドに挟まれているため、憲法51条で「非同盟中立」を規定しています。政権の評価は両国からどれだけの援助金を引き出すかになっているように思われます。2-3年毎の政権交代は結果的に両国のバランスをとっているネパール外交の「したたかさ」と考えれば、意義のある対応かもしれません。アジアで最貧国であるネパールにとって、諸外国からの援助金が頼りでアメリカやEUとの調和も必要になってきます。これまでの政権の任務は国民生活向上よりこうした綱渡りの外交政策が主となっているように思います。今回の選挙での各政党マニフェストをみても当たり障りのない政策でした。

しかし、領土問題(中国・インド間)、平和問題(中国、インド、ロシア、アメリカへの対応)、人権問題(ネパール人とインド系ネパール人とのあつれき)になると、各党の違いが浮き彫りになって、党の分裂や連立政権の崩壊などが現れてくるのがこれまでの経過です。

2008年にネパール王国から共和制に移行した時には大きな期待がありましたが、国民不在の政治が続き、それを反映してか一昨年のカトマンズ市長選挙では、無党派の30代の候補者が当選しました。

ネパールは地政学的にも重要な位置にあり、中国、インド、アメリカなどの核を持った大国の利害がぶつかっています。

ネパールが今後とも非同盟中立路線の堅持と国民生活の安定を両立させていくことを願っています。同じような地政学的位置にある日本は、アメリカ一辺倒で他国と対立する国づくりではなく、戦争放棄の憲法9条を持つ国であり、アジア全体に非同盟中立の動きを作る役割を果たすべきではないでしょうか。そのためにもネパールの「したたかな外交」を学ぶのも参考になると思っています。